

2018年度 修士論文

スポーツイベントが参加者の
スポーツライフスタイルに与える
影響に関する研究
ーランニングイベントに焦点を当ててー

Research on the Impact of
Sport Event Participant's Sport Life Style
-Focus on Running Events-

早稲田大学 大学院スポーツ科学研究科
スポーツ科学専攻 スポーツビジネス研究領域
5017A074-3

劉 暢宇

研究指導教員： 木村 和彦 教授

目次

第1章 序論	1
第1節 研究背景	1
第1項 ランニングの現状	1
第2項 日本におけるランニングイベントの現状	3
第2節 先行研究	5
第1項 スポーツイベントの社会的効果に関する研究	5
第2項 スポーツライフスタイルにおける研究	8
第3節 研究目的	9
第4節 研究意義	9
第5節 仮説	10
第2章 研究方法	11
第1節 用語の定義	11
第1項 スポーツライフスタイル	11
第2項 ランニングイベント	12
第2節 研究枠組みの提示	12
第3章 結果と考察	13
第1節 イベント前のスポーツライフスタイル把握	13
第1項 調査概要	13
第2項 調査項目および質問方法	13
第3項 分析方法	14
第4項 調査①結果	14
第2節 イベント後のスポーツライフスタイル把握	22

第1項 調査概要	22
第2項 調査項目および質問方法	23
第3項 分析方法	24
第4項 調査②結果	24
第3節 ランニングイベントのスポーツライフスタイルへの影響	31
第1項 イベント前後のスポーツライフスタイルの比較分析	31
第2項 満足度がスポーツライフスタイルに与える影響	34
第3項 参加動機がスポーツライフスタイルに与える影響	35
第4項 モデレート効果の検討	37
第5項 考察	38
第4章 結論	42
第1節 スポーツイベントが参加者のスポーツライフスタイルに与える影響	42
第2節 実践的示唆	44
第3節 研究の限界と今後の課題	45
参考文献	47
巻末資料	53
謝辞	67

第 1 章 序論

第 1 節 研究背景

第1項 ランニングの現状

近年,健康への関心が高まり,身近な運動などを推奨することにより,取り組みやすい健康増進活動を普及することが求められている.様々なスポーツ種目がある中でも「ランニング」は用具に要する費用が少なく,場所を選ばず,気軽に参加できることから愛好者が多い(邑木,2011).2007年「東京マラソン」の誕生をきっかけに,日本において大きなランニングブームが起こり,ランニングイベントの数が増えている.2013年には,年間900回以上ランニングイベントが開催されていた(武藤,2013).2017年12月にインターネットのランニングサイトに登録される大会は1300件を超え(小杉,2017),現在同一サイトでは1800件以上のイベントが登録されている(2018年11月時点).スポーツイベントを通し,地域住民のQOLの向上や地域活性化の手段として期待されている.そのため,年々増加しているランニングイベントはより多くのランニング実施に導くことができるのではないかと考えた.

しかし,笹川スポーツ財団が発表しているスポーツライフに関する調査では,年に1回ランニングを実施するランニング人口の推計で2012年は1009万人をピークに減少し,2014年986万人,2016年は893万人になった.本格的に週2回ランニングを行うランニング習慣がある人は,2012年385万人から,2014年374万人,2016年364万人に減ってきたと推定されている(笹川スポーツ財団,2015).全体的にランニング実施率が低下していることがみられる.これらのデータをみると,ランニングイベントが増加しているのに対して,ランニング

を実施する人口が減少する傾向を示している。ランニングイベントの開催はランニング実施の増加を引き出していないのかと考えた。

これまでスポーツイベントの効果に関わる研究は、スポーツイベントの経済、地域活性化の影響に焦点を当ててきた。またランニングイベントの経済的影響に関する研究では、参加者の支出から経済効果を導くとした研究が多く見られる（野川,2010,二宮ら,2014,江頭,2016）。参加者の支出については、既存データから参加者の支出額を予測する方法がとられている。また、二宮ら（2014）は、MICE 経済波及効果測定モデルを用いて経済波及効果を算出した。さらに、社会的効果としてスポーツイベントを通して地域活性化を実現することも注目されている。

“地域活性化”は、地域に何らかの付加価値をもたらす状態である（大西,2013）。木田（2013）は、スポーツイベントを開催することはスポーツそのものの振興や青少年の育成、地域活動や各種交流の促進などの社会的効果があると指摘している。大窄ら（2012）は、スポーツイベントの開催は、地域住民や参加者に活力を与え、健康の保持増進への寄与へつながっていくと示した。したがって、今後、少子高齢化や健康問題がさらに深刻な問題となるといわれている地域において、スポーツイベントを通して市民の健康促進に導くことを期待し、さらにスポーツイベントの社会的効果が注目を集めていくことが予想される。ランニングイベントの開催は参加者のランニング参加、およびスポーツへの興味、関心などへのつながりを明らかにすることが必要だと考えた。

第 2 項 日本におけるランニングイベントの現状

スポーツエントリーのホームページを閲覧して日本全国におけるランニングイベントの現状を把握した。

2017 年日本全国において、1862 のランニングイベントが開催された。その中に、制限時間があるものは 1460 (78.4%)、参加費が必要なイベントは 1858 (99.8%) であった。大部分のイベントは制限時間と参加費があることがわかる。種目についてみると、ウルトラ 72

(3.9%)、フル 204 (11.0%)、30 キロ 225 (12.1%)、ハーフ・20 キロ 887 (47.6%)、15 キロ 319 (17.1%)、10 キロ 1248 (67.0%)、5 キロ 1012 (54.4%)、5 キロ以下 649 (34.9%)、親子ラン 614

(33.0%)、駅伝・リレー 586 (31.5%)、トリム^{脚注 13} (0.7%)、トレイル・山岳レース・クロスカントリー 202 (10.8%)、記録会 48

(2.6%) であった。10 キロ種目が最も多く開催され、次は 5 キロ、ハーフ・20 キロ、5 キロ以下、親子ラン、駅伝・リレーの順になった。一般人が手軽に参加できるランニングとしては比較的距離の短いイベントが数多く行われ、アスリートだけではなく、より多くの一般人がランニングを楽しむことができる。また、参加者数では、1000 名以下位 844

(45.3%)、1001～2000 名 299 (16.1%)、2001～5000 名 204

(11.0%)、5001～10000 名 72 (3.9%)、10001 名 45 (2.4%)、不明

(21.4%) であった (図 1)。1000 名以下の小規模なイベントが約半数を占めている。地域住民のために開催される小規模ランニングイベントが多いことが推測される。

¹ トリムとは、走る前に自分がどのくらいのタイムで走れるか申告しておき、実際のタイムと比べてより近い人が勝つという種目である。

上述のように,健康づくりにおいて,地域住民に最も身近なスポーツの1つとして,ランニングが注目され,イベントとして開催されてきていることがわかる.過酷なマラソン競技ではなく,一般市民の参加が多く見られている.各地で開催されるランニングイベントは大会規模,走行距離,参加者のレベルも様々である.開催自治体などは,多様なランニングイベントを通して住民に「スポーツをやりましょう」と働きかけ,スポーツ振興や運動による健康促進に取り組む機会となるイベントを運営する事で,参加者に日常の健康管理に対する認識を効果することを期待している.それゆえ,本研究は,参加者のランニングイベント前後にあるスポーツライフスタイルの有り方を把握することにより,今後のスポーツイベントの開催に有用な知見を提供できると考える.

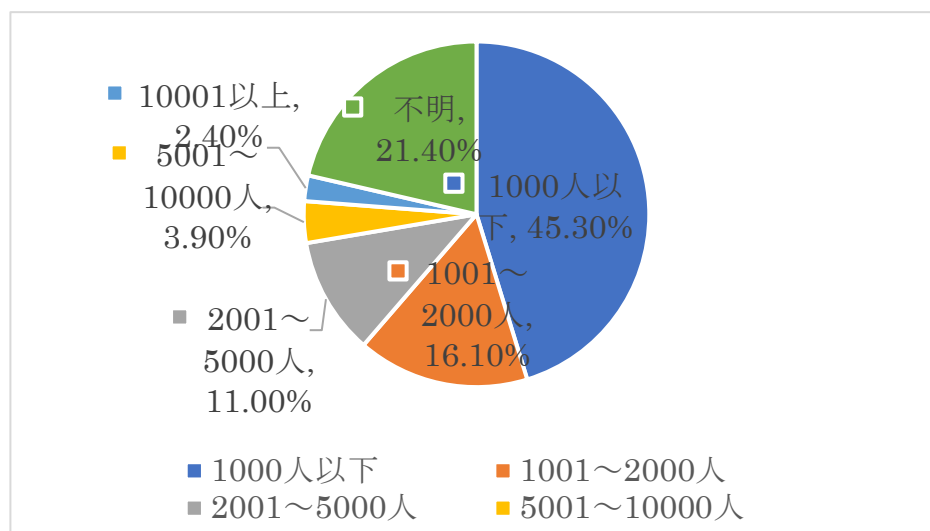


図 1 2017 年開催されるランニングイベント規模

第 2 節 先行研究

第 1 項 スポーツイベントの社会的効果に関する研究

原田（2002）は、スポーツイベントの開催が地域にもたらす主な効果として、1）スポーツ施設などの社会資本を蓄積する、2）スポーツツーリストの活発な消費活動を誘導、地域経済を活性化する、3）地域の連帯性を向上する、4）地域のイメージを向上する、の 4 つ挙げている。また、Taks（2013）は、力関係、都市再生、社会発展、人的資本という 4 つの異なる視点を用い、メガスポートイベントとノンメガスポートイベントの社会的影響を比較した。全体として、ノンメガスポートイベントは、メガスポートイベントより、ホスト地域の社会的影響やアウトカムがポジティブであることを示し、ノンメガスポートイベントが、より密接なソーシャルネットワークの構築と地域住民の関係をつなげる可能性がある」と指摘した。このことから、地域のヒト・モノ・コトという地域資源をスポーツイベントに付加価値として結び付けていくことは、大会の振興・地域の活性化の両方の意味で重要になってくると考えられる。

スポーツはスポーツイベントの中核であるため、スポーツイベントからスポーツ参加への結果は期待されていると思われる。スポーツイベントは地域住民の個人発展とスキル向上に役立つことが示されている（Taks, Misener, Chalip, & Green, 2014）。

観戦型スポーツイベントに関しては、観戦者がエリートスポーツイベントに触発され、身体的およびスポーツ活動への参加を増加させるという効果を生み出しているという研究結果がある。Frawley & Cush（2011）は、2003 年オーストラリアでラグビーワールドカップを開催後に、ラグビーの登録者数は増加し、特にシニアよりジュニアが多く増

加したことを示した。また Weed ら (2009) は、ロンドンオリンピック・パラリンピックの後、観戦者の身体活動が活発になったとして、トリクルダウン効果^{脚注2}の証拠を提示した。しかし、トリクルダウン効果は新しいスポーツ参加者を集めるより、既存のスポーツ参加者を維持するほうが高い可能性があることを示した。Ramchandani ら (2015) は、英国の 9 つの観戦型ノンメガスポーツイベントのスポーツ参加を評価した。彼らは、「初期」、「中期」、および「後期」の影響を含み、以前の活動的および非活動的回答者のイベント後の参加行動の増加を明らかにし、観戦型ノンメガスポーツイベントが参加者のスポーツ参加の増加に寄与する可能性があることを示した。Ramchandani&Coleman (2012) は、イギリスの 3 つのスポーツイベントで観戦者がイベント経験から自分自身のスポーツ参加を促進させること示し、スポーツイベントに参加した結果として、観戦者のスポーツ参加へ態度が変化することを明らかにした。一方、Mahtani ら (2013) は、オリンピックやパラリンピック観戦後にスポーツ活動への参加が増加したかどうかを調査し、証拠が不十分で、増加したとは結論づけることはできなかった。

観戦型スポーツイベントに対して、参加型スポーツイベントに実際に参加することは、スポーツへの関与にポジティブな影響を与える証拠がいくつかある。Bowles,Rissel&Bauman (2006) は、初心者ライダーがサイクリングイベントの 1 ヶ月後にスポーツ参加を大幅に増やしたことを確認した。また Lane,&Bauman (2008) は、ダブリンミニマラソンに参加するために、既にアクティブな女性はよりはるかに多くのトレーニングを取り入れたと示した。しかし、非アクティブな参加者

² スポーツにおいてトリクルダウンドアウン効果とは、スポーツ実施者はイベントでさらにスポーツに参加定着させること、およびスポーツ実施者はイベントにスポーツ未実施者を呼び、身体活動やスポーツ参加を引き起こす概念である。

に関しては、スポーツイベント後にスポーツ参加の増加につながるという証拠は少ない。Derom & Wynsberghe & Scheerder (2013) は、参加者がサイクリングイベントに参加することによって身体活動のレベルを向上させる意図に焦点を当て研究し、身体活動レベルを向上させるために、社会生態学の理論を通じて、該当イベントはサイクリング遺産という戦略を利用し、自転車観光、およびサイクリングへの積極的な参加意図を向上させることを示した。

スポーツイベントにおいて、マーケットペネトレーション^{脚注3}を活用し、より多くの人々がスポーツをすることができると考えられる。要するに、既存のスポーツ参加者がより活発にスポーツをすることにより、非アクティブなスポーツ参加者もアクティブに変えることが可能だと思われる。しかし、上記の研究では、観戦型スポーツイベントは参加者のスポーツ参加を促進することとスポーツへの興味が向上することができると確認した。だが、参加型スポーツイベントの社会的効果、参加者のスポーツ参加およびスポーツに対する態度への影響を明らかにしていなかった。また、これまでスポーツイベントの効果に関わる研究では、欧米を中心に進められ、日本においてはあまり研究が行われていない。したがって、日本において、スポーツイベントの開催は経済、地域発展に寄与する可能性があるだけでなく、社会的効果として地域住民のスポーツへの関心や態度、スポーツ参加にどのような影響を与えるのか、より詳細に明らかにする必要があるだろう。

³ マーケットペネトレーションとは、既存のマーケット内での製品売上向上のためにしようするマーケティング戦力である。スポーツイベントの場合は、イベントを広告し、より良く開催することで多くの人を呼ぶこと。

第 2 項 スポーツライフスタイルにおける研究

スポーツイベントとスポーツライフスタイルの関係に関する研究は、スポーツ経営学、スポーツ社会学分野において行われている。Kim ら（2015）はスポーツイベントを開催することで、地域住民がスポーツへの興味が向上し、スポーツ参加率が上昇することを実証した。Chen&Tian（2015）は、スポーツイベントが地域住民のクオリティオブライフ（生活の質）を向上させることを示した。また Pappas（2014）は、スポーツイベントの開催が、住民の意識変化をもたらすことを明らかにしている。北村ら（2000）は、スポーツイベントが気軽に参加することができ、高いイベント満足度を得られれば、その後の運動・スポーツ継続の動機づけの 1 つとなる可能性があることを明らかにしている。原田・菊池（1990）により、ライフスタイルの要因には、年齢によって大きく変動するものとそうでないものがあることが明らかになり、年齢によるライフスタイルのあり方の差異が存在していることを示している。筆者が確認した限り、スポーツイベントとスポーツライフスタイルの関係に関わる先行研究が少なく、調査対象もオリンピックなどのメガスportsが多く、地域主導のノンメガスportsイベントを対象とする先行研究は、管見ながら見られなかった。今後メガスportsイベントだけではなく、地方自治体が開催している小規模のスポーツイベントが地域住民のスポーツライフスタイルに与える影響を明らかにし、ひいてはスポーツイベントを通して、より健康的な地域づくりのあり方を検討していくにはより詳細な実証的確認をする必要があるだろう。

第 3 節 研究目的

本研究の目的は、ランニングイベント参加者のイベント前後のスポーツライフスタイルを比較することにより、ランニングイベントへの参加が、参加者のスポーツライフスタイルに与える影響を明らかにすることである。そこで、本研究ではランニングイベントに参加する予定がある方のスポーツライフスタイルを把握し、スポーツをするだけではなく、スポーツに対して興味、意見を確認する（調査①）。また、ランニングイベント後に、同じ調査対象のスポーツライフスタイルがどのように変化したのかを明らかにする（調査②）という 2 つの段階を遂行することによって研究を進めていくこととする。それに加えて、参加動機、参加経験、他のイベントへの参加、満足度や参加費用といった要因のモデレート効果を検証する。

第 4 節 研究意義

学術的意義については、これまで調査においても行われてこなかったランニングイベントの参加がスポーツライフスタイルに与えるより詳細な影響について把握することにより、今後スポーツライフスタイルに関する研究やスポーツイベントの社会的効果に関する研究の蓄積に貢献できると考えている。

また、社会的・実践的意義については、スポーツイベントに参加する前後のスポーツライフスタイルの差異を比較する本研究によって、実際のイベント参加によって生じた影響を明らかにすることができ、今後スポーツイベントの開催を検討していく地域が健康促進効果を図るためにスポーツイベントの進み方を検討する際に一つの資料になりえると考えている。

第 5 節 仮説

参加型スポーツイベントの効果に関して、初心者ライダーがサイクリングイベントの 1 ヶ月後にスポーツ参加を大幅に増加した

(Bowles,Rissel,Bauman,2006) という結果、北村ら (2000) は、スポーツイベントに高い満足度を得られれば、その後の運動・スポーツ継続の動機づけの 1 つとなる可能性があるとし示している。これらの先行研究を参考にし、仮説 1 から 5 を提示する。

H1：ランニングイベントに参加することは、スポーツ参加のみならず、スポーツに関する興味や態度を含むイベント参加者のスポーツライフスタイルにポジティブな影響を与える。

H2：仮説 1 の関係は、参加満足度が高いほど強い。

H3：参加動機によって、ランニングイベント後のスポーツライフスタイルは異なる。

H4：仮説 1 の関係は、ランニングイベントの経験者より未経験者のほうが強い。

H5：仮説 1 の関係は、調査期間中に他のイベントに参加した者ほど強い。

第 2 章 研究方法

第 1 節 用語の定義

第 1 項 スポーツライフスタイル

マーケティング分野における「ライフスタイル」とは、1つの集団現象であり、生活の多側面、多領域に浸透し、生きがいや価値観を含み、かつ、いくつかの社会的変数に応じて変異するものである

(Feldman・Thielbar,1975)。また井関(1979)は、ライフスタイルは生活価値観や関心、態度を反映するものであることを示唆している。

川西・長ヶ原・北村(1993)は、「スポーツライフスタイル」とは、日々のスポーツ活動内容、スポーツ活動周辺の物事への興味・関心、スポーツ活動に対する社会的・個人的諸問題についての意見である、と定義した。また北村・川西・池田(1997)は、個人の価値観や興味、態度などを包含する概念を用い、スポーツ参加者をより詳細に捉えた。さらに原田・菊池(1990)によれば、ライフスタイルは生活・行動・思考様式といった多面的な生活システムを包括的にとらえる概念であり、ライフスタイル・アプローチの視点から、スポーツ行動を多面的「生活」現象の一部として捉える必要があるという。井澤・松永・中野(2012)は北村ら(1997)を参考に、スポーツに対する価値観や態度に焦点を当てた。醍醐・木村・作野(2015)によれば、スポーツライフスタイルとは人々はスポーツをするだけでなく、みる、支える、話すといった多様な生活の形であるとしている。これらの先行研究を参加にして、本研究においては、「スポーツライフスタイル」を「スポーツに関わる行動および興味・関心、態度」とであると定義した。

第 2 項 ランニングイベント

「ランニングイベント」という用語については,走ることに
出来事や試合であると考えられる.本研究では,短距離 (50 メー
トル) や長距離 (マラソン) など距離を問わない.また,競技レベルも親
子ペアで走り,山中を走る,競技マラソンとは違った趣旨の軽く走るイ
ベントをすべて含むこととする.具体的には,以下のように分類した.
ウルトラマラソン (42.195KM より長い) ,フルマラソン,30KM,ハー
フ・20KM,15KM,10KM,5KM,5KM 未満,親子マラソン,駅伝・リレー,
トリム,トレイル,山岳レース,クロスカン トリー,記録会・トラック,と
なった.

第 2 節 研究枠組みの提示

本研究は,2 つの調査で構成される.調査①では,指定される期間中に
ランニングイベントに参加する予定がある方を対象にアンケート調
査を実施し,イベント参加前のスポーツライフスタイルを把握する.調
査②では,約 1 ヶ月後に,調査①で精査・確認された尺度を用い,同じ
被験者に対して,同様のスポーツライフスタイルに関するアンケート
調査を実施し,ランニングイベント参加後のスポーツライフスタイル
を把握する.調査①と調査②の比較分析を行い,ランニングイベントへ
の参加がスポーツライフスタイルに及ぼす影響を明らかにする.

第 3 章 結果と考察

第 1 節 イベント前のスポーツライフスタイル把握

第 1 項 調査概要

本研究では,上記目的を果たすにあたり,11月3日から11月18日まで全国に開催されるランニングイベントに参加する予定がある方を対象に,運動・スポーツ実施状況とスポーツライフスタイルに関する項目を含んだ調査票を用いて,インターネット調査を実施した.具体的な調査実施方法としては,イベント参加前に,11月2日から11月3日まで1回目の調査を行った.

第 2 項 調査項目および質問方法

1. 調査項目の設定

参加動機については,Funk&Bruun(2007)が作成したスポーツ参加動機に関する25項目を西尾(2013)が和訳をしたものから,14項目(スポーツツーリズムに関する参加動機を除く)を選定した.スポーツライフスタイルについては,マーケティングの分野で用いられる AIO (Activity:日々のスポーツ活動内容,Interest:スポーツ活動周辺の物事への興味・関心,Opinion:スポーツ活動に対する社会的・個人的諸問題についての意見)アプローチによって操作設定した社会心理学的な尺度である,北村・川西・池田(1997)および川西・長ヶ原・北村(1993)が作成したスポーツ的ライフスタイル尺度を参考に,スポーツそのものに対する興味・関心,態度の項目を選定して合計19項目が調査された.その他,1回目の調査項目は以下の通り.1回目の調査内容:1)個人的属性,2)過去ランニングイベント参加経験,3)スポーツ実施頻度,4)今回のランニングイベント参加動機,5)スポーツライフスタイル.

2. 質問方法

参加動機およびスポーツライフスタイルに対して,1（全く当てはまらない）～5（非常に当てはまる）の 5 段階のリッカート・タイプ尺度によって測定された.そして,スポーツライフスタイルに関する項目の因子得点を算出する.スポーツ実施頻度は「全くしない」～「週に 5 日以上」の 7 段階の回答を用いた（スポーツの実施状況等に関する世論調査,2017）.その他の過去ランニングイベント参加経験や個人属性に関する質問については,数字の記入や該当する項目に印をつける方法を用いて回答を求めた.

第 3 項 分析方法

調査 1 では,得られたデータを用いて,ランニングイベントの参加動機尺度の妥当性と信頼性の検討を行う.分析には IBM SPSS Statistics25 を用い,探索的因子分析を行い,IBM SPSS AMOS25 を用いて確認的因子分析を行い,因子負荷量を算出し,尺度の信頼性は Cronbach's α 係数を算出することにより検討することとした.

第 4 項 調査①結果

11 月 3 日で締め切られ,ランニングイベント参加予定者 516 名から回答が得られた.その中から,回答が完全ではなかったサンプルを除外し,最終的に 515 部（有効解答率 99.8%）サンプルとした.

1. デモグラフィックス

サンプルの属性を表 1 に示している.性別では男性 466 名 (90.5%) に対して女性が 46 名 (9.5%) と男性が圧倒的に多いサンプルとなった.京都マラソン 2014 年のランナー調査研究レポートでは参加者の中に男性 77.9%,女性 22.1%であった.2013 年鹿児島リレーマラソン参加者の大会満足度 (北村,2014) により,サンプルの性別では男性 75.8%に対して女性 24.2%であった.居住地からみた都市型市民マラソン参加者の消費行動:奈良マラソン 2014 の参加に伴う消費支出額の分析 (辻・二宮ら,2016) により,サンプルに男性 80.3%,女性 19.7%であった.マラソンイベント参加者には男性は女性より多いことがわかった.また,インターネット調査の適用可能性と限界-データ科学の視点からの考察- (大隅,2002) により,インターネット調査登録者に男性 6 割,女性 4 割を占めすと示している.登録者の性別偏りを考え,今回のサンプルが,男性が圧倒的に女性より多くなったが,本サンプルが極端に偏っていないとは判断できることが了解される.

また,年代別では 40 歳代が最も多く (36.1%),次いで 30 歳代 (26.0%),50 歳代 (19.2%),20 歳代 (18.6%),60 歳代以上はなしであった.京都マラソン 2014 ランナー調査研究レポートにより,40 歳代 35.2%,30 歳代 21.2%,50 歳代 20.3%,60 歳代の参加者は 5%だけであった.マラソンイベント開催による村の地域活性化に関する研究-うろぎトライアル RUN 参加者の支出による検討 (大勝,2017) に示したサンプル特性の年代別の順も同じであった.それに,インターネット調査登録者は年代が上がるにつれて少なくなり (大隅,2002),60 歳

代以上のサンプルが無しのことは今回のインターネット調査の限界である。

居住地では東北地方 23 名（4.5%）,関東地方 274 名（53.2%）,中部地方 32 名（6.2%）,近畿地方 160 名（31.1%）,九州地方 26 名（5.0%）であった。11 月 2 日から 16 日までに九つの地域でしかランニングイベントを開催されなかったため,今回のサンプルに上記の地域に偏りがある。婚姻状況では既婚者 338 名（66%）,未婚者 177 名（34%）であった。子供の有無では子供あり 289 名（56%）,子供なし 226 名（44%）であった。職業では会社員 341 名（66.2%）,公務員 40 名（7.8%）,自営業 32 名（6.2%）,学生 28 名（5.4%）の順であった。京都マラソン 2014 ランナー調査研究レポートにより,会社員 64.3%,公務員 11.1%,自営業・自由業 7.1%であった。2013 年鹿児島リレーマラソン参加者の大会満足度（北村,2014）には会社員 39.0%,公務員 20.3%,学生 9.5%であった。上位 2 つの職業の順位が一致している。世帯年収では 600～800 万未満が最も多く（19.4%）,次いで 400～600 万未満（17.5%）,800～1000 万未満が続いており（15.3%）,1000～1200 万未満（10.9%）の順であった。1000 万以上の方は合計で 22.1%であり,年収が高い偏りを示した。居住地からみた都市型市民マラソン参加者の消費行動：奈良マラソン 2014 の参加に伴う消費支出額の分析（辻・二宮ら,2016）により 400 万～800 万未満は 4 割に対して今回のサンプルに 400 万～800 万未満の層は 36.9%であった。世帯の所得が消費支出額に影響を及ぼしている可能性があると考えられる。

2. ランニングイベントの参加経験

参加型スポーツ活動に関する研究では、参加者の活動経験を知るにあたり、これまでの活動経験に応じて参加者の分類を行っている

(Petrick et al.,2001) .本研究においても、ランニングイベントの参加経験に対する回答から、参加予定者の中に以前ランニングイベントに参加したことがない未経験者が 110 名、21%に対し、経験者は 405、79%であった。経験者の中に、1 回参加経験ありの方は 60、全体的の 11.7%、2 回は 79、15.3%、3 回は 46、8.9%、4 回は 11、2.1%、5 回は 56、10.9%、6 回は 10、1.9%、7 回は 11、2.1%、8 回は 11、2.1%、9 回は 2、0.4%、10 回以上は 119、23.1%であった（表 2）.今回のサンプルは経験が 3 回以内の新手と 10 回以上のベテランは多いと占められている。

表 1 デモグラフィックス（n=515）（調査①）

n			%					
【性別】			【年齢】					
男性	466	90.5%	20代	96	18.6%			
女性	46	9.5%	30代	134	26.0%			
【地域】			40代	186	36.1%			
			50代	99	19.2%			
			60代以上	0	0.0%			
			【子供の有無】					
			子供なし	226	43.9%			
東北地方	23	4.5%	子供あり	289	56.1%			
関東地方	274	53.2%	【職業】					
中部地方	32	6.2%						
近畿地方	160	31.1%						
九州地方	26	5.0%						
【未婚】								
未婚	177	34.4%	公務員	40	7.8%			
既婚	338	65.6%	経営者・役員	9	1.7%			
【世帯年収】			会社員	341	66.2%			
			自営業	32	6.2%			
			自由業	12	2.3%			
			専業主婦(主夫)	14	2.7%			
			パート・アルバイト	23	4.5%			
			学生	28	5.4%			
			その他	12	2.3%			
			無職	4	0.8%			
			200万未満	15	2.9%	全体	515	100.0%
			200～400万未満	51	9.9%			
400～600万未満	90	17.5%						
600～800万未満	100	19.4%						
800～1000万未満	79	15.3%						
1000万以上	114	22.1%						
わからない	27	5.2%						
無回答	39	7.6%						
全体	515	100.0%						

3. 現在のスポーツ実施頻度

現在のスポーツ実施頻度については、全くしないは 10 名,1.9%,年に 1～3 日以下は 27 名,5.2%,3 ヶ月に 1～2 日は 32 名,6.2%,月に 1～3 日は 81 名,15.7%,週に 1～2 日は 183 名,35.5%,週に 3～4 日は 87 名,16.9%,週に 5 日以上は 95 名,18.4%であった（表 2）.ここでは、スポーツ実施は通勤や通学などの生活運動を除き、散歩などの軽い運動を含めて意図的に 1 日 30 分以上の運動時間があることを指す.結果からみると、定期的にスポーツ実施を行っている比率が多いとわかった.

表 2 過去の参加経験とスポーツ実施頻度

	n	%		n	%
未経験者	110	21.0%	全くしない	10	1.9%
1回経験	60	11.7%	年に1～3日	27	5.2%
2回経験	79	15.3%	3ヶ月に1～2日	32	6.2%
3回経験	46	8.9%	月に1～3日	81	15.7%
4回経験	11	2.1%	週に1～2日	183	35.5%
過去の参加経験	56	10.9%	週に3～4日	87	16.9%
5回経験	10	1.9%	週に5日以上	95	18.4%
6回経験	11	2.1%	全体	515	100.0%
7回経験	11	2.1%			
8回経験	2	0.4%			
9回経験	119	23.1%			
10回以上経験	515	100.0%			
全体					

4. 参加動機の結果および因子分析結果

参加動機の結果については、表 3 が示した通りになった.

探索的因子分析による因子の抽出

参加動機については、Funk&Bruun(2007)が作成したスポーツ参加動機から、14 項目を抽出した.探索的因子分析（最尤法、プロマックス回転）を行った.因子抽出では固有値を 1.0 以上に設定し、因子負荷量

を 0.40 以上基準として結果,参加動機は 3 因子 14 項目で分散の 54.59%が説明された.

(1) 第 1 因子：便益因子

参加動機第 1 因子は,「ランニングで興奮を味わいたいから」「ランニングで新たな自分を発見したいから」「生活に変化を与えたいから」「走っていることによって満足感を得たいから」「ランニングで達成感を味わいたいから」「日常生活から離れたいから」「他のレジャーより価値があるから」「ランニングイベントへ参加することは重要だから」の 8 項目から構成された.ランニングを実施することで得られるものと解釈できるため「便益」と命名した.

(2) 第 2 因子：関心因子

参加動機の第 2 因子は,「走ることに興味があるから」「走る事が好きだから」「ランニングへの関心が高いから」「走ることは重要だと思うから」の 4 項目から構成された.よって,先行研究を参考に「関心」と命名した.

(3) 第 3 因子：社交因子

参加動機の第 3 因子は,「新しい人と出会いたいから」「他の参加者と喜びを分かち合いたいから」の 2 項目から構成された.先行研究を参考に「社交」と命名した.

それに,測定尺度の信頼性を検証するため,Cronbach's α 係数による動機尺度の内的整合性を検討した.参加動機 3 因子の項目に関する α 係数は,「便益因子」が.86,「関心因子」が.85,「社交因子」が.79であった.信頼性の基準となる.70 以上と示しており,本研究で用いた尺度の信頼性は問題がないと判断した.

表 3 参加動機の結果

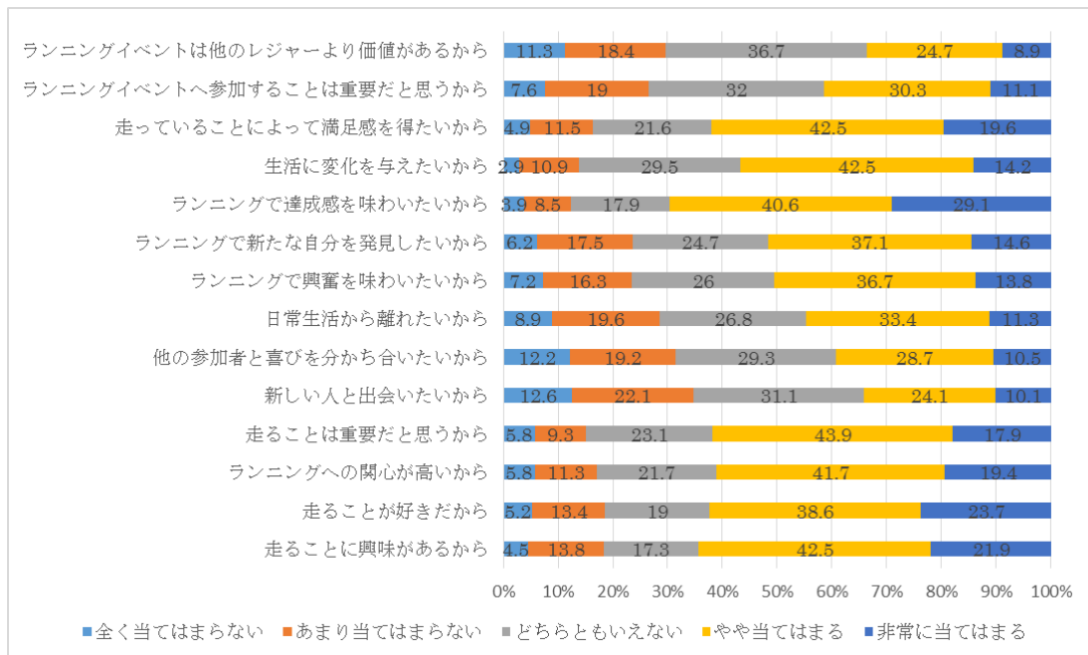


表 4 参加動機探索的因子分析結果（最尤法・プロマックス回転）

因子名	項目内容	因子負荷量		
		1	2	3
便益因子 (固有値=6.02, 寄与率=39.09%, $\alpha=0.86$)	ランニングで興奮を味わいたいから	0.73		
	ランニングで新たな自分を発見したいから	0.73		
	生活に変化を与えたいから	0.65		
	走っていることによって満足感を得たいから	0.65		
	ランニングで達成感を味わいたいから	0.58		
	日常生活から離れたいから	0.58		
	他のレジャーより価値があるから	0.45		
	ランニングイベントへ参加することは重要だから	0.45		
関心因子 (固有値=1.78, 寄与率=9.96%, $\alpha=0.85$)	走ることに関心があるから		0.92	
	走ることが好きだから		0.89	
	ランニングへの関心が高いから		0.69	
	走ことは重要だと思うから		0.46	
社交因子 (固有値=1.03, 寄与率=5.54%, $\alpha=0.79$)	新しい人と出会いたいから			0.92
	他の参加者と喜びを分かち合いたいから			0.64

確認的因子分析による尺度の妥当性の検証

尺度の妥当性を検討するため、確認的因子分析を行った。モデル適合度はあまりよくないため、修正指数値を確認した。共分散分析の結果、「ランニングイベントより他のレジャーより価値があるから」と「ランニングイベントへ参加することは重要だから」の修正指数は極めて高く、2項目の関連性があると考えられる。本研究の調査対象は

中小規模のランニングイベント参加者であり,イベントが重要より価値があるほうが説明力は高いと考えるため,「ランニングイベントへ参加することは重要だから」を削除した.残りの 13 項目で確認的因子分析を行った結果,モデルの因子間相関を許容したモデルであった ($\chi^2=199.114$, $p=.000$, 自由度 = 62) .尺度モデルのデータへの適合度の結果は ($\chi^2/df=3.212$, $RMSEA=.099$, $GFI=.877$, $AGFI=.819$, $CFI=.879$) が許容範囲内であった(Browne&Cudeck,1993) .したがって,「ランニング大会へ参加することは重要だから」項目を除外して,本研究を使用した参加動機尺度は信頼性,妥当性共に問題のない尺度だと考えられる.参加動機尺度の確認的因子分析のパス図を図 2 に示す.

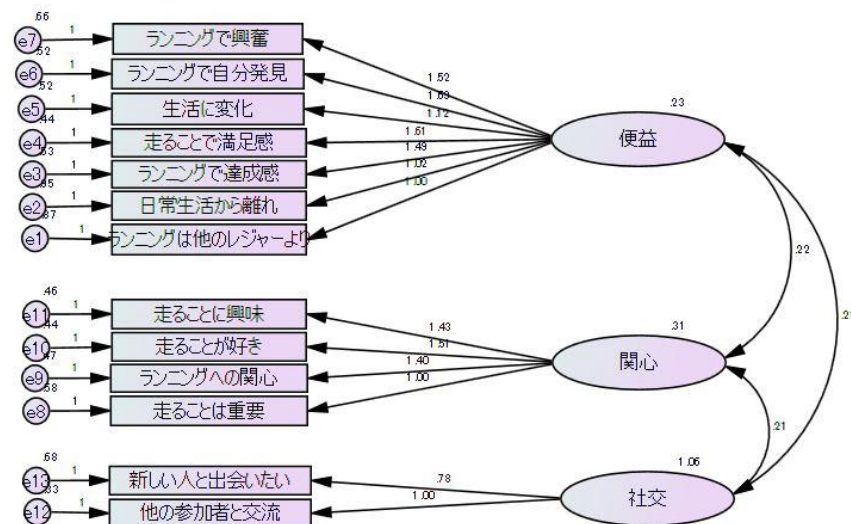
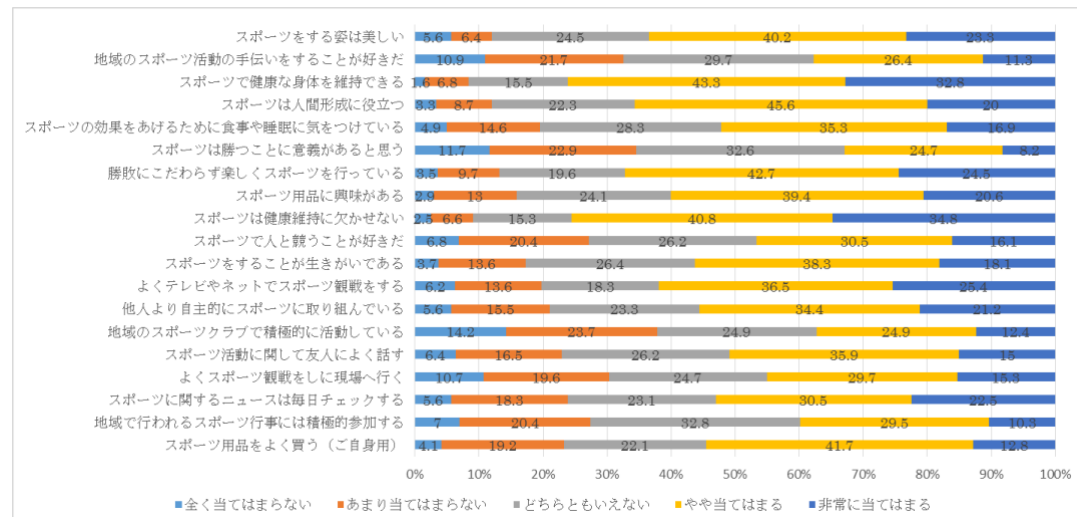


図 2 参加動機・確認的因子分析のパス図

5. スポーツライフスタイルの結果

調査①で得られたスポーツライフスタイルの結果は表 5 に示すようになった。

表 5 調査①のスポーツライフスタイル結果



第 2 節 イベント後のスポーツライフスタイル把握

第 1 項 調査概要

本研究では、ランニングイベントのスポーツライフスタイルへの影響を把握するために、イベント前後の差異を分析することにした。具体的には、上記の調査①の回答者を対象に、運動・スポーツ実施状況とスポーツライフスタイルに関する項目を含んだ調査票を用いて 2 回目のインターネット調査を実施した。具体的な実施期間は 12 月 8 日である。その結果、調査①と調査②の間に最短 20 日、最長 35 日の間隔があることになる。

第 2 項 調査項目および質問方法

1. 調査項目の設定

スポーツライフスタイルについては,調査 1 と同様に,マーケティングの分野で用いられる AIO アプローチの尺度を使った.北村・川西・池田(1997)および川西・長ヶ原・北村(1993)が作成したスポーツ的ライフスタイル尺度を参考に,スポーツそのものに対する興味・関心,態度を選定して合計 19 項目が調査された.

2 回目の調査内容: 1) 個人的属性,2) 参加したランニングイベントのジャンル,3) 参加されたイベントは居住地の県内か県外,4) イベント満足度,5) イベントのためにかかった費用,6) 宿泊の有無,7) ほかのスポーツイベントの参加状況,8) スポーツ実施頻度,9) スポーツライフスタイル.

2. 質問方法

満足度,スポーツライフスタイルに対して,1(全く当てはまらない)~5(非常に当てはまる)の 5 段階のリッカート・タイプ尺度によって測定された.そして,スポーツライフスタイルに関する項目の因子得点を算出し,比較分析した.スポーツ実施頻度は「全くしない」~「週に 5 日以上」の 7 段階の回答を用いた(スポーツの実施状況等に関する世論調査,2017).その他の今回参加したイベントの種目,参加日,イベントは居住地の県内か県外,イベントのためにかかった費用,宿泊の有無,ほかのスポーツイベント参加状況,個人属性に関する質問については,数字の記入や該当する項目に印をつける方法を用いて回答を求めた.

第 3 項 分析方法

調査 2 では,得られたデータを用いて,スポーツライフスタイル尺度の妥当性と信頼性の検討を行う.分析には IBM SPSS Statistics25 を用い,探索的因子分析を行い,IBM SPSS AMOS25 を用いて確認的因子分析を行い,因子負荷量を算出し,尺度の信頼性は Cronbach's α 係数を算出することにより検討することとした.調査 1 と調査 2 の比較は対応のある t 検定によって分析を行い,分析用ソフトには IBM SPSS25 を用いた.また,線形関係を検討するために,回帰分析を行い,分析用ソフトには IBM SPSS25 を用いた.統計的有意水準はすべて 5% とした.

第 4 項 調査②結果

12 月 8 日で締め切られ,ランニングイベント参加予定者 309 名から回答が集まったが,実際にはイベントに参加しなかったものなど,回答が完全ではなかった 83 部を除外し,最終的に 226 部 (有効解答率 73.1%) サンプルとした.

1. デモグラフィックス

サンプルの属性を (表 6) に示している.性別では男性 209 名 (92.5%) に対して女性が 17 名 (7.5%) であり,1 回目と同じく男性が圧倒的に多い.ランニングイベント参加者特性には男性は女性より多いが,今回のデータに男女差が激しい結果となった.また,年代別では 20 代 41 名,18.1%,30 代 68 名,30.1%,40 代 77 名,34.1%,50 代 40 名,17.7%,30 代と 40 代に集中している.特に,40 代が多い結果は他のランニングイベント参加者特性と一致している.

居住地では東北地方 10 名（4.4%）,関東地方 120 名（53.1%）,中部地方 12 名（5.3%）,近畿地方 75 名（33.4%）,九州地方 9 名（4.0%）であった。婚姻状況では既婚者 155 名（66%）,未婚者 71 名（34%）であった。子供の有無では子供あり 138 名（61.1%）,子供なし 88 名（38.9%）であった。職業では公務員 15 名（6.6%）,経営者・役員 4 名（1.8%）,会社員 163 名（72.1%）,自営業 12 名（5.3%）,自由業 4 名（1.8%）,専業主婦（主夫） 5 名（2.2%）,パート・アルバイト 10 名（4.4%）,学生 9 名（4.0%）,その他 3 名（1.3%）,無職 1 名（0.4%）であった。会社員が最も多く,公務員がその次になった。世帯年収では 200 万未満 4 名（1.8%）,200～400 万未満 18 名（8.0%）,400～600 万未満 41 名（18.1%）,600～800 万未満 43 名（19.0%）,800～1000 万未満 39 名（17.3%）,1000 万以上 55 名（24.3%）,わからない 9 名（4.0%）,空白 17 名（7.5%）であった。サンプルの世帯年収は日本の平均世帯年収より高い偏りを示した。

表 6 デモグラフィックス（調査②）

n		%	n		%
【性別】			【年齢】		
男性	209	92.5%	20代	41	18.1%
女性	17	7.5%	30代	68	30.1%
【地域】			40代	77	34.1%
東北地方	10	4.4%	50代	40	17.7%
関東地方	120	53.1%	【子供の有無】		
中部地方	12	5.3%	子供なし	88	38.9%
近畿地方	75	33.4%	子供あり	138	61.1%
九州地方	9	4.0%	【職業】		
【未既婚】			公務員	15	6.6%
未婚	71	34.0%	経営者・役員	4	1.8%
既婚	155	66.0%	会社員	163	72.1%
【世帯年収】			自営業	12	5.3%
200万未満	4	1.8%	自由業	4	1.8%
200～400万未満	18	8.0%	専業主婦(主夫)	5	2.2%
400～600万未満	41	18.1%	パート・アルバイト	10	4.4%
600～800万未満	43	19.0%	学生	9	4.0%
800～1000万未満	39	17.3%	その他	3	1.3%
1000万以上	55	24.3%	無職	1	0.4%
わからない	9	4.0%	全体	226	100.0%
無回答	17	7.5%			
全体	226	100.0%			

2. 参加したイベントの種目と参加実態

参加したランニングイベントの種目に関して、表 7 のように示した。ウルトラマラソン 11 名、フルマラソン 47 名、30KM9 名、ハーフ・20KM58 名、15KM4 名、10KM31 名、5KM19 名、5KM 未満 10 名、親子マラソン 19 名、駅伝・リレー7 名、トレイル 4 名、山岳レース 3 名、クロスカントリー2 名、記録会・トラック 2 名であった。本格的なフルマラソンとハーフマラソンに参加した比率が高いと示した。参加日について、11 月 3 日 41 名、4 日 17 名、5 日 9 名、6 日 1 名、7 日 2 名、8 日 1 名、9 日 1 名、10 日 20 名、11 日 24 名、12 日 8 名、13 日 4 名、14 日 2 名、15 日 13 名、16 日 6 名、17 日 16 名、18 日 61 名であった。そのため、調査①と調査②の間隔は最短 20 日、最長 35 日となった。参加されたイベントは居住地の県内か県外に関して、県内は 162 名、県外 64 名であった。宿泊なし 202 名、宿泊あり 24 名であり、その中に一泊 16 名、2 泊 5 名、3 泊 2 名、4 泊 1 名となった。イベントのためかかった費用では、0 円 9 名、1 円～1 万円未満 104 名、1 万円～2 万円未満 54 名、2 万円～3 万円未満 28 名、3 万円～4 万円未満 10 名、4 万円～5 万円未満 8 名、5 万円～6 万円未満 5 名、6 万円～7 万円未満 2 名、7 万円～8 万円未満 0 名、8 万円～9 万円未満 2 名、9 万円～10 万円未満 0 名、10 万円以上 4 名であった。1 万円前後に支出した比率が約 70% になった。

3. 満足度

参加したランニングイベントの満足度に関して、非常に不満 10 名 (4.4%)、やや不満 24 名 (10.6%)、どちらともいえない 49 名 (21.7%)、やや満足 101 名 (44.7%)、非常に満足 42 名であった (18.6%)。調査 1 と調査 2 の間に他のスポーツイベントの参加状況については、参加なし

122名(54.0%),参加あり 104名(46.0%)となった(表7)。

4. 現在のスポーツ実施頻度

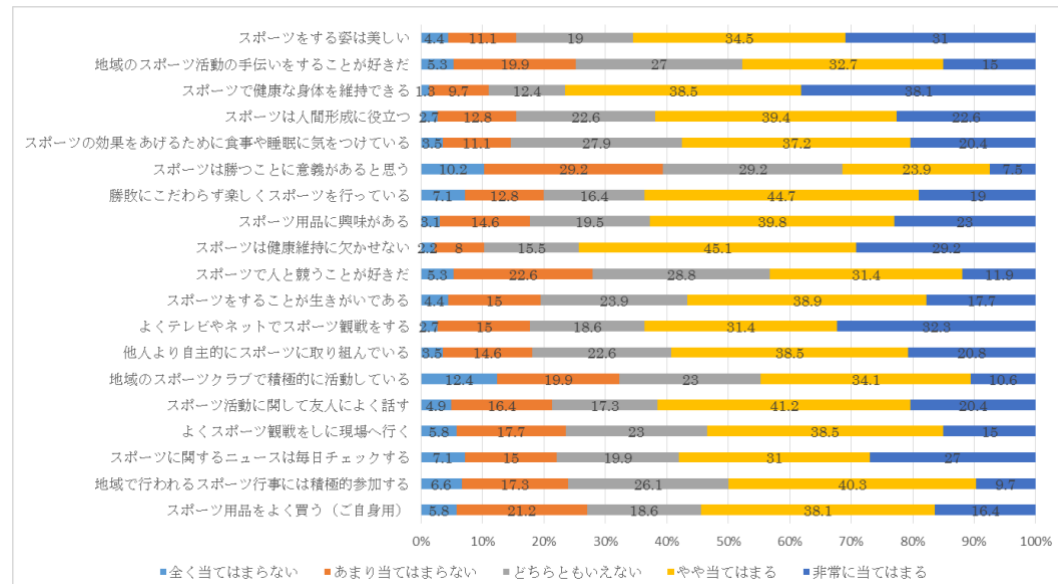
調査2を実施する時点のスポーツ実施頻度に関しては、全くしない6名、年に1～3日以下19名、3ヶ月に1～2日20名、月に1～3日35名、週に1～2日62名、週に3～4日47名、週に5日以上37名であった(表7)。

表7 参加実態

		n	%			n	%
参加したイベントの種目	ウルトラマラソン	11	3.6%	参加されたイベント の開催場所	お住まいの都道府県内	162	71.7%
	フルマラソン	47	15.2%		お住まいの都道府県外	64	28.3%
	30KM	9	2.9%	宿泊の有無	なし	202	89.4%
	ハーフマラソン・20KM	58	18.8%		あり	24	10.6%
	15KM	4	1.3%	宿泊の数	1泊	16	7.1%
	10KM	31	10.0%		2泊	5	2.2%
	5KM	19	6.1%		3泊	2	0.9%
	5KM未満	10	2.3%		4泊	1	0.4%
	親子マラソン	19	6.1%	イベントに参加する ために使った支出	0円	9	4.0%
	駅伝・リレーマラソン	7	2.3%		1万円～1万円未満	104	46.0%
	トリムマラソン	0	0.0%		1万円～2万円未満	54	23.9%
	トレイルラン	4	1.3%		2万円～3万円未満	28	12.4%
	山岳レース	3	1.0%		3万円～4万円未満	10	4.4%
	クロスカントリー	2	0.6%		4万円～5万円未満	8	3.5%
	記録会・トラック	2	0.6%		5万円～6万円未満	5	2.2%
満足度	非常に不満	10	4.4%		6万円～7万円未満	2	0.9%
	やや不満	24	10.6%		7万円～8万円未満	0	0.0%
	どちらともいえない	49	21.7%		8万円～9万円未満	2	0.9%
	やや満足	101	44.7%		9万円～10万円未満	0	0.0%
	非常に満足	42	18.6%		10万円以上	4	1.8%
イベント後 スポーツ実施頻度	全くしない	6	2.7%	調査期間中に 他のイベントの参加有無	なし	122	54.0%
	年に1～3日以下	19	8.4%		あり	104	46.0%
	3ヵ月に1～2日	20	8.8%		全体	226	100.0%
	月に1～3日	35	15.5%				
	週に1～2日	62	27.4%				
	週に3～4日	47	20.8%				
	週に5日以上	37	16.4%				
全体		226	100.0%				

5. スポーツライフスタイルの結果と因子分析結果

表 8 調査②のスポーツライフスタイル結果



探索的因子分析による因子の抽出

北村・川西・池田（1997）および川西・長ヶ原・北村（1993）が作成したスポーツ的ライフスタイル尺度を参考に、合計 19 項目が調査された。探索的因子分析（最尤法、プロマックス回転）を行った。因子抽出では固有値を 1.0 以上に設定し、因子負荷量を 0.40 以上基準として結果、スポーツライフスタイルは 3 因子 14 項目で分散の 54.03% が説明された（表 9）。

（1）第 1 因子：スポーツ効果因子

スポーツライフスタイル第 1 因子は、「スポーツで健康な身体を維持できる」「スポーツは人間形成に役立つ」「スポーツは健康維持に欠かせない」「勝敗に拘らず楽しくスポーツする」「スポーツをする姿は美しい」「スポーツ効果をあげるために食事や睡眠に気を

つけている」「スポーツをすることは生きがいである」の 7 項目から構成された.先行研究を参考に「スポーツ効果」と命名した.

(2) 第 2 因子：スポーツ志向因子

スポーツライフスタイルの第 2 因子は,「スポーツで人と競うことが好きだ」「スポーツは勝つことに意義があると思う」「地域のスポーツ活動の手伝いが好きだ」の 3 項目から構成された.先行研究を参考に「スポーツ志向」と命名した.

(3) 第 3 因子：間接的スポーツ行動因子

スポーツライフスタイルの第 3 因子は,「よくスポーツ観戦をしに現場へ行く」「スポーツ活動に関して友人によく話す」「よくテレビやネットでスポーツ観戦」「スポーツに関するニュースは毎日チェック」の 4 項目から構成された.よって,「間接的スポーツ行動」と命名した.

それに,測定尺度の信頼性を検証するため,Cronbach's α 係数による動機尺度の内的整合性を検討した.参加動機 3 因子の項目に関する α 係数は,「スポーツ効果因子」が .89,「スポーツ志向因子」が .72,「間接的スポーツ行動因子」が .83 であった.信頼性の基準となる .70 以上と示しており,本研究で用いた尺度の信頼性は問題がないと判断した.

確認的因子分析による尺度の妥当性の検証

尺度の妥当性を検討するため,確認的因子分析を行った.モデル適合度はあまりよくないため,修正指数を確認した.共分散分析の結果,「勝敗に拘らず楽しくスポーツをする」と「スポーツで健康維持に欠かせない」の修正指数は極めて高く,2 項目の関連性があると考え

られる.他の項目を考慮した上,「スポーツで健康な身体を維持できる」と「スポーツで健康維持に欠かせない」は同じ意味であるため,比較的の説明力が低い「スポーツで健康維持に欠かせない」を削除した.残りの13項目で確認的因子分析を行った結果,モデルの因子間相関を許容したモデルであった($\chi^2=194.666$, $p=.000$, 自由度=62).尺度モデルのデータへの適合度の結果は($\chi^2/df=3.140$, $RMSEA=.098$, $GFI=.884$, $AGFI=.830$, $CFI=.902$)が許容範囲内であった(Browne&Cudeck,1993).したがって,「スポーツで健康維持に欠かせない」項目を除外して,本研究を使用したスポーツライフスタイル尺度は信頼性,妥当性共に問題のない尺度だと考えられる.スポーツライフスタイル尺度の確認的因子分析のパス図を図3に示す.

表9 スポーツライフスタイル探索的因子分析結果
(最尤法・プロマックス)

因子名	項目内容	因子負荷量		
		1	2	3
スポーツ効果 (固有値=7.89, 寄与率=43.76%, $\alpha=0.89$)	スポーツで健康な身体を維持できる	0.88		
	スポーツは人間形成に役立つ	0.88		
	スポーツは健康維持に欠かせない	0.78		
	勝敗に拘らず楽しくスポーツを行っている	0.67		
	スポーツをする姿は美しい	0.65		
	スポーツの効果をあげるために食事や睡眠に気を付けている	0.46		
	スポーツをすることが生きがいである	0.41		
スポーツ志向 (固有値=1.52, 寄与率=6.25%, $\alpha=0.72$)	スポーツで人と競うことが好きだ		0.78	
	スポーツは勝つことに意義があると思う		0.60	
	地域のスポーツ活動の手伝いをすることが好きだ		0.52	
間接的スポーツ行動 (固有値=1.11, 寄与率=4.02%, $\alpha=0.83$)	よくスポーツ観戦をしに現場へ行く			0.86
	スポーツ活動に関して友人によく話す			0.60
	よくテレビやネットでスポーツ観戦をする			0.55
	スポーツに関するニュースは毎日チェックする			0.53

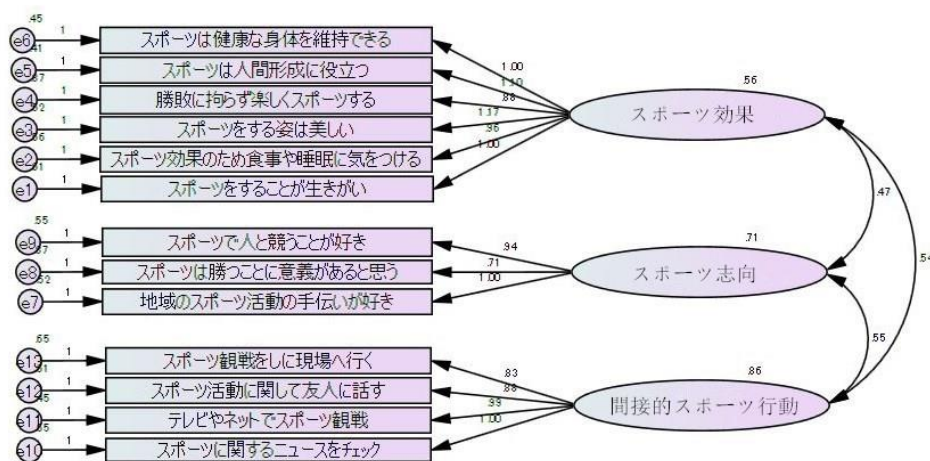


図 3 スポーツライフスタイル・確認的因子分析のパス

第 3 節 ランニングイベントのスポーツライフスタイルへの影響

第 1 項 イベント前後のスポーツライフスタイルの比較分析

ランニングイベント参加前後にあるスポーツライフスタイルの定量的な比較をするために、調査②の 226 サンプルの番号に対応する調査①の結果をまとめた。スポーツ実施頻度は順序尺度で測ったため、ウィルコクソンの符号付順位検定を行った結果、5 % 水準で有意な差が確認された。ランニングイベント前後に、参加者のスポーツ実施頻度が変わることがわかった。それに、ランニングイベント前後の変化傾向をみるために、順序尺度の 7 段階の中央値を元に、年間の平均スポーツ実施回数を算出し、対応のある t 検定を行った結果、有意な差が確認された。平均値からみると、イベント後の年間スポーツ実施数はイベント前の年間スポーツ実施数より減少した。(図 4)

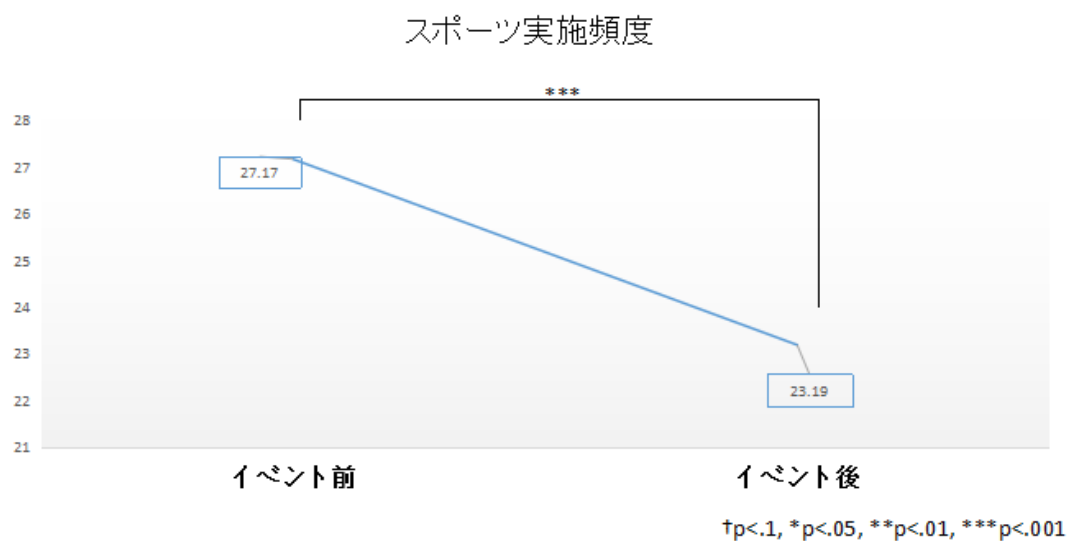


図 4 スポーツ実施頻度の変化

それに,スポーツライフスタイルの各因子をそれぞれの因子得点を算出し,対応のある t 検定を行った結果,有意な差が見られなかった。(表 10)。

表 10 イベント前後のスポーツライフスタイル (対応のある t 検定)

	イベント前		イベント後		t値	有意差	比較
	M	SD	M	SD			
スポーツ効果	22.57	4.15	22.11	4.94	1.6	n.s.	前>後
スポーツ志向	9.75	2.67	9.44	2.66	1.77	n.s.	前>後
間接的スポーツ行動	14.31	3.62	14.27	3.77	0.22	n.s.	前>後

†p<.1, *p<.05, **p<.01, ***p<.001

ランニングイベント前後の「スポーツ実施頻度」のみ有意な差が見られた ($p < 0.1$)。この結果からイベント参加後には,ランニングイベント参加前のスポーツ実施頻度より明らかに低くなったことがわかった (図 4)。スポーツ効果の得点 (図 5) およびスポーツ志向 (図 6),間接的スポーツ行動 (図 7) の平均値が減少したが,有意な差が確認されない。これらの結果によって,仮説 1 を却下する。

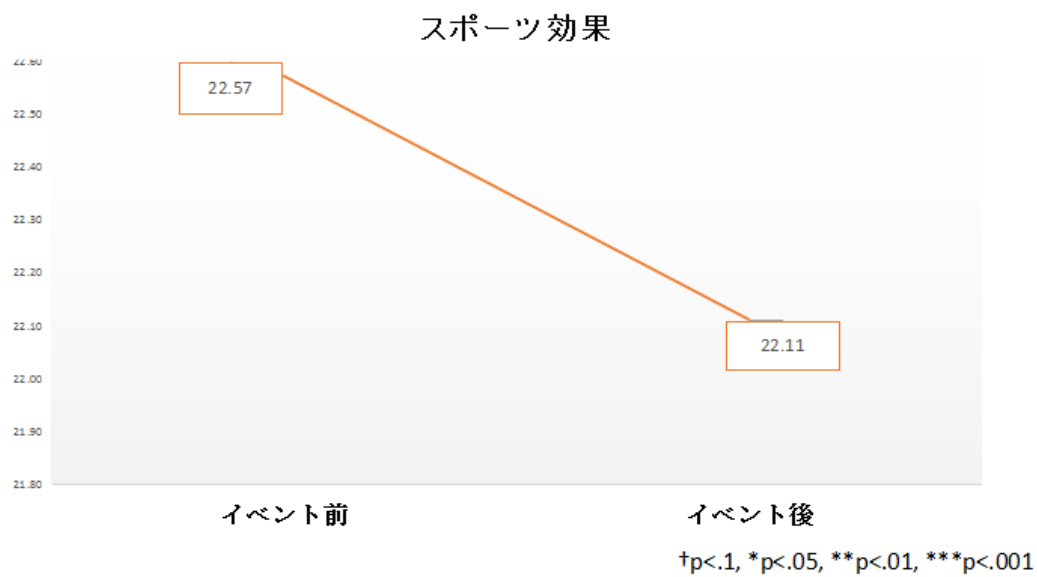


図 5 スポーツ効果に対する興味・意見の変化

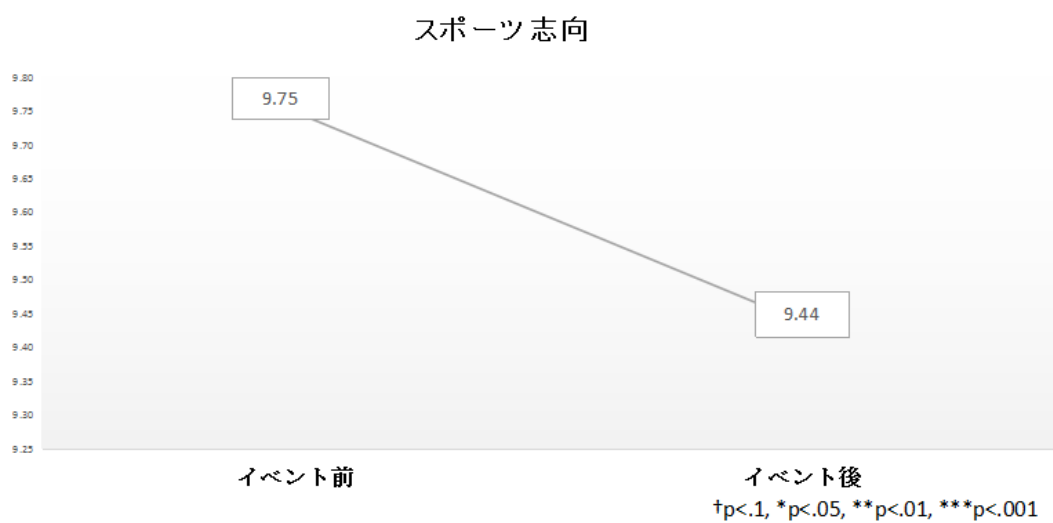


図 6 スポーツ志向に対する興味・意見の変化

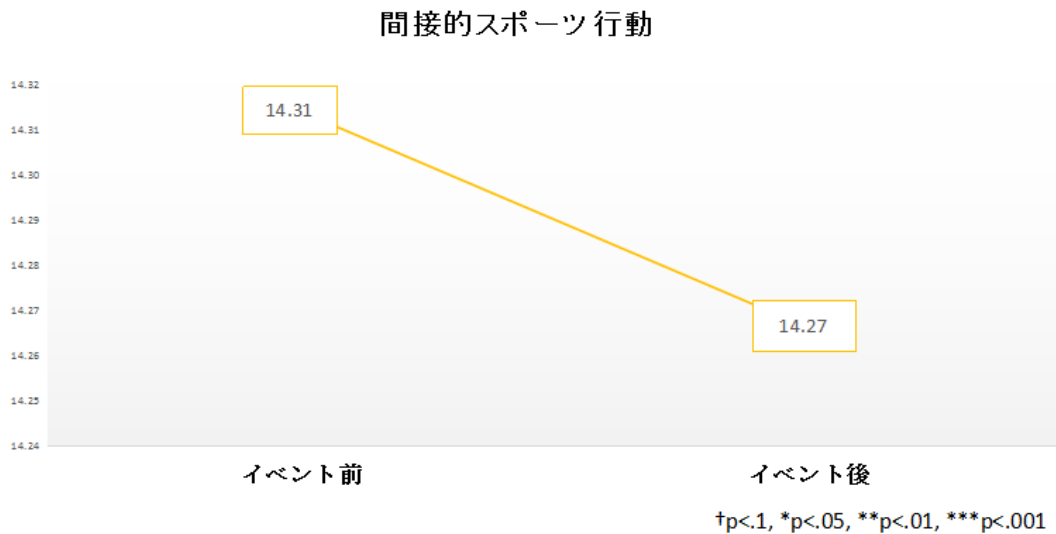


図 7 間接的スポーツ行動の変化

第 2 項 満足度がスポーツライフスタイルに与える影響

ランニングイベントに対する満足度はその後のスポーツに関わる行動、関心、意見に及ぼす影響を検討するために、満足度とスポーツライフスタイルと回帰分析を行った。独立変数は満足度、従属変数は前後のスポーツ効果得点差異、スポーツ志向得点差異、間接的スポーツ行動得点差異であり、強制投入法で回帰分析を行った。結果として、スポーツ効果とスポーツ志向統計的に有意差が確認された。スポーツ効果に対し、10%水準で有意確率があった（ $R^2=0.020$ 、標準化係数 $\beta = 0.142$ ）。説明力 R^2 は低いが、満足度は媒介変数として、参加者がイベント後にスポーツ効果に対してポジティブな影響を与えることを読み取ることができる。また、スポーツ志向に対し、10%水準で統計的に有意な差異があった（ $R^2=0.020$ 、標準化係数 $\beta = 0.142$ ）。参加者がイベント後にスポーツ志向に対してポジティブな影響を与えることを読み取ることができる（上記にあるイベント前後のスポーツライフスタイルの比較で、スポーツ効果差異とスポーツ志向差異に有意な差がな

いため,ここでの R^2 が低い) .仮説 2 の一部を支持する結果となったが, R^2 は低いため,満足度は媒介変数とする説明力は低い.一方,満足度は間接的スポーツ行動に対して統計的に有意な差は確認されなかった (図 8) .

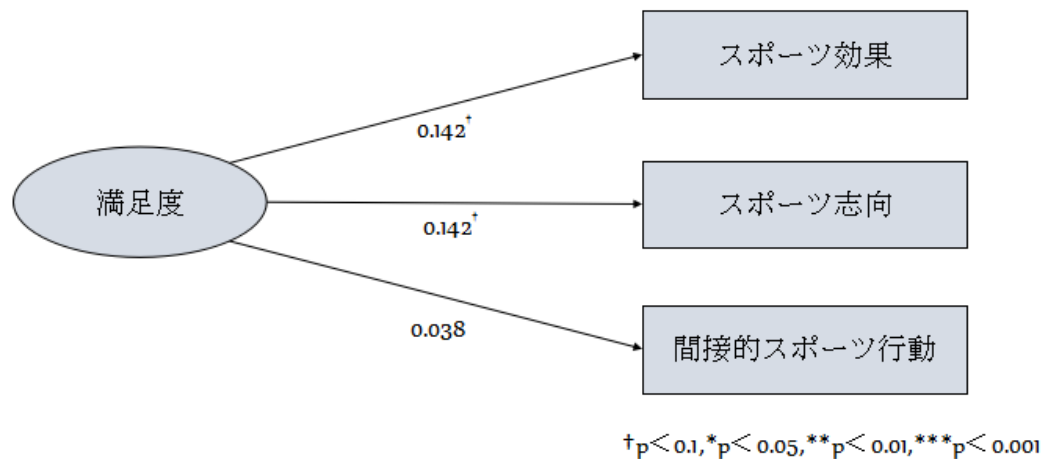


図 8 満足度とスポーツライフスタイルの回帰分析結果

第 3 項 参加動機がスポーツライフスタイルに与える影響

ランニングイベントの参加動機が参加者のイベント後のスポーツライフスタイルに及ぼす影響を検討するために,参加動機とスポーツライフスタイルとの回帰分析を行った.調査①で精査した 3 つの参加動機因子を独立変数として,前後のスポーツ効果得点の差異,スポーツ志向得点の差異,間接的スポーツ行動得点の差異を従属変数として,それぞれ強制投入法で単回帰分析を行った.便益動機はスポーツ効果,スポーツ志向,間接的スポーツ行動の 3 つ共に有意な差が確認された.便益動機はスポーツ効果に対し,10%水準で有意な差があった ($R^2 = 0.021$,標準化回帰係数 $\beta = -0.144$) .スポーツ志向に対し,5%水準で有意な差があった ($R^2 = 0.021$,標準化係数 $\beta = -0.144$) .間接的スポー

ツ行動に対し,5%水準で有意な差が確認された ($R^2=0.033$,標準化回帰係数 $\beta = -0.181$) .便益動機が高ければ,参加者のスポーツ効果,スポーツ志向および間接的スポーツ行動に対して負の影響を与えることが読み取れた.次に,関心動機はスポーツ効果,スポーツ志向,間接的スポーツ行動と統計的に有意な関係が確認された.スポーツ効果に対し,10%水準で有意な差があり ($R^2=0.021$,標準化回帰係数 $\beta = -0.144$) ,スポーツ志向に対し,5%水準で有意差があった ($R^2=0.021$,標準化回帰係数 $\beta = -0.144$) .間接的スポーツ行動に対しては,5%水準で統計的に有意な関係があった ($R^2=0.033$,標準化回帰係数 $\beta = -0.181$) .このことは関心動機が高ければ,スポーツ効果,スポーツ志向,間接的スポーツ行動にネガティブ影響を及ぼすことを示している.社交動機はスポーツライフスタイル 3 因子との有意差が確認されなかった (図 9) .また,間接的スポーツ行動と有意差がある便益動機と関心動機の共線性関係がないことも確認された.つまり,便益動機と関心動機はそれぞれ間接的スポーツ行動に影響をおよぼすことがわかった.仮説 3 を支持する結果となった.

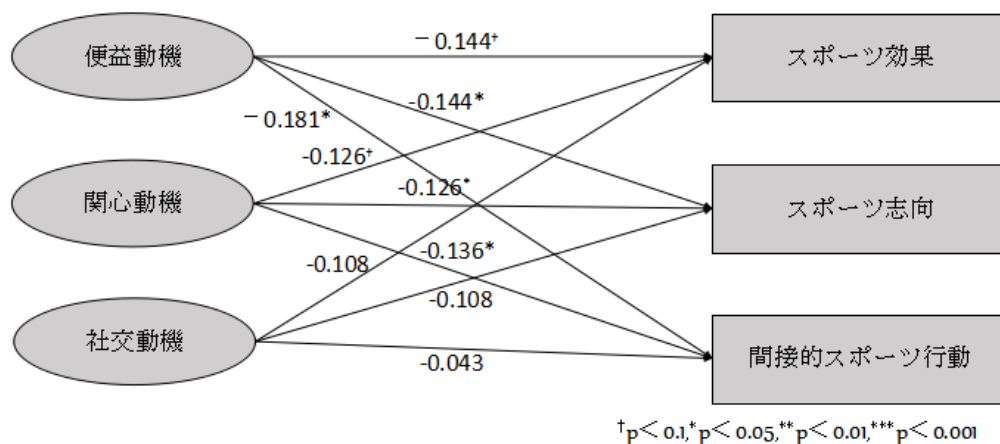


図 9 参加動機とスポーツライフスタイルの回帰分析結果

第 4 項 モデレート効果の検討

アンケートで理解した参加者特性,参加実態とイベント前後にあるスポーツライフスタイルの関係性を検討した.

まずは,過去ランニングイベントに参加した経験の数に従って,0 回は未経験者,1 回～5 回は少経験者,6 回～10 回以上は多経験者という 3 つのグループに分けて,スポーツライフスタイルと分散分析を行った.スポーツライフスタイルの 3 因子ともに有意な差は確認できなかった.したがって,仮説 4 を却下する結果となった.

次に,参加した種目について,距離が把握できない種目を削除し,フルマラソンとウルトラマラソン (42.195KM より長い) は長距離,ハーフ・20KM～30KM は中距離,5KM 未満～15KM は単距離という 3 つのグループに分けて分析を行った分析結果も,有意な差は確認されなかった.ランニングイベントのためにかかった費用については,1 万円未満を少支出,1 万円～3 万円未満を中支出,3 万円～10 万円以上を多支出として,3 つのグループでスポーツライフスタイルとの分散分析の結果もすべて有意な差はみられなかった.

調査①と調査②の間に他のスポーツイベントに参加有無とスポーツライフスタイルの関係として,スポーツ効果とスポーツ志向に対し,10%水準で統計的に有意な差がみられた.スポーツ効果を従属変数とした場合 ($F=3.566, p<.1$),調査されたランニングイベントのみに参加して他のスポーツイベントに参加なしグループの平均値は -0.96,他のスポーツイベントに参加ありグループの平均値は 0.13 となった.ランニングイベント後,この期間中に他のスポーツイベントに参加しない人はスポーツ効果に対する変化がマイナスとなり,他のスポーツイベントに参加した人はスポーツ効果に対する変化がポジティブ

ブとなった.スポーツ志向を従属変数とした場合 ($F=3.566, p<.1$), 参加なしグループの平均値は-0.96,参加ありグループの平均値は0.13 となった(表 11).ランニングイベント後,この期間中に他のスポーツイベントに参加しない人はスポーツ志向に対する変化がネガティブとなり,他のスポーツイベントに参加した人はスポーツ効果に対する変化がポジティブとなると推察できる.これは仮説 5 の一部を支持する結果となった.最後に,年代別にスポーツライフスタイルの変化を比較した.年代別を独立変数とし,スポーツライフスタイルを従属変数として有意な差が確認できなかった.

表 11 調査期間中に他のスポーツイベントの参加有無

	他のスポーツイベントに参加した		他のスポーツイベントに参加しなかった	
	M	SD	M	SD
スポーツ効果	0.13 †	3.74	-0.96 †	4.73
スポーツ志向	0.13 †	3.74	-0.96 †	4.73
間接的スポーツ行動	0.09	3.56	-0.16	3.15

† $p<.1$, * $p<.05$, ** $p<.01$, *** $p<.001$

第 5 項 考察

調査②では,ランニングイベント後に参加者のスポーツライフスタイル状況に着目し,比較分析することにより,イベントが引き起こした影響を明らかにしようとした.

まず,全体的にスポーツ実施頻度の結果により,ランニングイベント後に,1 ヶ月程度の短期的には,ネガティブな影響を生じていることが明らかとなり,間隔が短い,仮説 1「ランニングイベントに参加することは,スポーツ参加のみならず,スポーツに関する興味や態度を含むイベント参加者のスポーツライフスタイルにポジティブな影響を

与える」は反対される結果となった。先行研究では、スポーツイベントは参加者のスポーツ参加、スポーツへの興味を促進させる社会的効果を検証した（Lane, Murphy & Bauman, 2008; Kim ら, 2015）、ネガティブな影響について、先行研究においてはほとんど触れられていない。本研究において、イベント後に間隔 1 ヶ月の時点参加者のスポーツ参加、スポーツに関わる行動およびスポーツへの興味と態度はすべて下がったことが確認された。霜島（2014）は、テニス競技会の後（1 週間～2 週間）、参加者のスポーツ参加頻度も競技会前より少なくなることを検証した。本研究は類似な結果を得られた。一方、スポーツイベント参加前に目標を達成するために参加者のスポーツ実施頻度とスポーツ継続意欲が高くなり、逆にイベント後にスポーツ実施や継続意欲が減少してしまう可能性があると考えられる。本研究はスポーツイベント後のスポーツライフスタイルを測定したが、スポーツイベントの社会的効果を全面的に把握するために、今後はイベント前のスポーツライフスタイルにも研究を行っていく必要があると考えられる。

また、参加満足度が高いほど、参加者の一部のスポーツライフスタイルにより強いポジティブな影響を及ぼすことが確認された（仮説 2 を支持した）。先行研究において、スポーツサービスの利用満足度は行動意図に影響を与えていることが確認された（周・菊池, 2009）。北村ら（2000）は、スポーツイベントに高い満足度を得られれば、その後の運動・スポーツ継続の動機づけの 1 つとなる可能性があるとしている。本研究において、ランニングイベントが参加者はスポーツ効果とスポーツ志向に関わる意見や関心は明らかに促進されていることが確認された。満足度は間接的スポーツ行動にはっきり影響している証明はない。ランニングイベントと通じて、イベント満足度が高く得

られた地域住民はスポーツに対する興味,意見など全体的に向上することが可能と考えられる.直接的にスポーツに関わる行動に反映されていないが,良いスポーツイベントを開催することは,地域住民のスポーツに関わる考え方にいい影響を及ぼすことがわかった.また,参加者の参加動機はその後のスポーツに関する変化にも影響を与えていることが確認された.本研究において,便益動機はスポーツ効果,スポーツ志向,間接的スポーツ行動に明らかにネガティブな影響を与えている.関心動機もスポーツ効果,スポーツ志向,間接的スポーツ行動に明らかに負の影響を与えている.社交動機は明らかに有意な差がない.横田(2002)は,運動部活動参加者の参加動機とその後のスポーツ行動の関係性を検討したところ,時間に従って参加者がスポーツに対する成就感およびスポーツ継続意欲は減少することを示した.本研究においても,便益動機と関心動機は一時的に減少したことを表れた.仮説3の一部を支持する.先行研究とは異なり,社交動機の影響は明らかとなっていなかった.学校の部活動と比べて,ランニングというスポーツ種目は他人とのコミュニケーションが少ないだろう.それに,先行研究においては2年間半という長期間の変化を測定したものであり,本研究において,スポーツイベント直後にある変化であった.参加動機という媒介変数の影響を厳密に把握するためには,半年などのより長期間での検討や,インタビューなどの質的な調査による,追加的な検討が今後必要になると言えよう.

参加者の特性と実態はイベント後のスポーツライフスタイルに影響が生じる可能性について比較分析を行った.仮説4「ランニングイベントの経験者より未経験者のほうが強く変化する」については証明できなかった先行研究において,初心者ライダーがサイクリングイ

ベントの1ヵ月後にスポーツ参加を大幅に増加したことを実証したが (Bowles・Rissel・Bauman,2006),本研究において,過去ランニングイベント経験した数はスポーツライフスタイルの変化に関係がないことが確認された.サイクリングと比べて,ランニングはいつでもどこでもできるスポーツの一種類として,1回のランニングイベントで人を惹きつける能力が比較的に低いと推定する.単純接触効果^{脚注4}だと考えられる.繰り返し接すると好意度が高まる (生駒,2005).地域住民のスポーツ向上をさせるために,地域自治体はスポーツイベントを検討する際に地域,住民がスポーツと接する機会を増やさなければならないと言える.だから,年に1回だけのスポーツイベントはよい効果を収めないと考えられる.持続的・全面的なスポーツ推進のために,計画的に続けてスポーツイベントを行う必要があることがわかった.また,仮説5「間隔期間に他のスポーツイベントに参加した者はよりポジティブに影響されている」についても支持される結果となった.具体的には,他のスポーツイベントに参加した者は,スポーツ効果とスポーツ志向に関してポジティブに影響され,参加しなかった者は,スポーツ効果とスポーツ志向に関してネガティブに影響されている.それらの原因は,スポーツにおいて交互作用^{脚注5}だと考えられる.大勝 (2014) は,様々なスポーツを行っており,活動的な運動者のスポーツ実施意欲およびスポーツに対する興味が高いことを述べられた.本研究においても,他のスポーツイベントにも参加した方のほうがスポーツに対する態度が比較的にポジティブになると示した.要するに,ス

⁴ 単純接触効果とは,興味がなかったり,あまり好きではなかったりするものでも,頻繁に目に触れる機会があったら,その対象へ良い印象を持つようになるという効果である.

⁵ 交互作用とは,異なる因子が組み合わさることで相乗効果が現れることである.

スポーツイベント後にスポーツライフスタイル全体的にネガティブに変化するが、他のスポーツイベントへの参加によってはネガティブな影響が緩和されることが明らかになった。よって、地域自治体は定期的にスポーツイベントを行ううえに、参加者のスポーツ実施頻度やスポーツへの興味などを向上させつつ、多様なスポーツイベントを行うことが必要となり、それらのイベントの間の連携を作ることも有効であると言えよう。

第 4 章 結論

第 1 節 スポーツイベントが参加者のスポーツライフスタイルに与える影響

本研究はスポーツイベントの社会的効果に着目し、ランニングイベント前後に参加者があるスポーツライフスタイル状況を把握し、スポーツイベントが参加者のスポーツ実施、スポーツへの興味、関心といったスポーツライフスタイルにどのような影響をおよぼしたかを明らかにすることを目的とした。その方法として、参加者のランニングイベント前後のスポーツライフスタイルをインターネット調査によって明らかにし、定量的に比較分析することで、ランニングイベントが参加者のスポーツ実施やスポーツへの興味、関心といったスポーツライフスタイルにおよぼした影響を明らかにすることができた。

全国においてスポーツイベントの開催が徐々に増加してきており、本研究でランニングイベントは参加者のスポーツライフスタイルに与える影響を確認することができた。スポーツ実施頻度について、ランニングイベント後、少なくとも短期的に、参加者のスポーツ実施頻度はイベント前より下がる傾向が見られた。スポーツイベントを通して目

標を達成した後,一時的にスポーツ実施頻度が減少してしまうことが推測された.

一方,ランニングイベントに対する満足度によって生じた影響は肯定的になることも明らかとなった.満足度が高いほど,参加者はスポーツ効果,スポーツ志向については強くポジティブに変化することがわかった.このことは,より良いランニングイベントを開催できれば,地域住民のスポーツ促進にいい影響をもたらす可能性があることを示唆する結果となった.また,参加者の参加動機によってその後のスポーツライフスタイルに影響が生じていることが確認できた.参加者の便益動機と関心动機が高いほど,スポーツ効果,スポーツ志向,間接的スポーツ行動を否定的に変化させる.ランニングイベントを通して目標を達成した後,イベント前にあるスポーツから得られるものへの期待と比べ,全体的に緩んでしまうことが確認された.さらにスポーツイベントの効果を把握するために,長い期間後にスポーツライフスタイルの変化を理解する必要があるだろう.

また,参加者の特性によって生じた影響については,ランニングイベントの経験者であるかどうかは統計的にスポーツライフスタイルに影響がないことが明らかになった.しかし,調査期間中にランニングイベント以外に他のスポーツイベントにも参加した者のほうが,スポーツ効果に関わる興味・意見をポジティブに変化させたことが確認された.よって,他のスポーツイベントへの参加によってはイベント直後のネガティブな影響が緩和されることがわかった.さまざまなスポーツイベントの間に交互作用があると考えられる.スポーツ推進させるために,地域自治体は広域的な視点から,多様なスポーツイベントを継続的に展開することを検討する必要があることが示唆された.

今後,スポーツイベント後に,参加者のスポーツライフスタイルが短期的にネガティブになる結果を鑑み,しっかりと地域の諸資源を活用し,スポーツ推進の具体的方法を考慮した上で,定期的・長期的かつ多様性を踏まえて地域住民の特性にふさわしいスポーツイベントを検討していくことが重要であると考えられる.

第 2 節 実践的示唆

ここでは本研究で明らかとなったランニングイベントが参加者のスポーツライフスタイルに与える影響から,今後地域自治体がスポーツイベントの開催に向けて若干の提言を行う.まず,明らかとなったランニングイベント後短期的にスポーツライフスタイルがネガティブになることから,スポーツイベントの開催を検討している自治体にとっては,1 回のみスポーツイベントを開催することは参加者の健康維持に効果が弱く,定期的にスポーツイベントを展開することが効果的だと考えられる.しかも,イベント満足度は参加者のスポーツライフスタイルに効果的に作用する可能性があるから,より参加者のニーズに適合した,スポーツイベントを整えていくことが重要であることが再確認できた.

調査期間中に他のスポーツイベントに参加した者にはスポーツに対する興味,意見へのネガティブな影響が緩和されることができると,1 種類のみスポーツイベントの開催ではなく,様々なスポーツイベントを企画する必要があると考えられる.地域住民は多くのスポーツを楽しむことができれば,スポーツへの興味が深くなり,スポーツ参加に導くことができる可能性が示唆された.今後スポーツイベントの開催を検討する自治体は,以上の実践的示唆を考慮した上で,地域住民

が望ましく,スポーツ推進に効果があるイベントの展開に取り組むことを検討することが重要であると言えよう.

第 3 節 研究の限界と今後の課題

本研究における限界として,調査期間が短いことである.本研究は縦断的研究によるスポーツイベント前後にあるスポーツライフスタイルを把握するものであったが,1ヶ月の間隔でサンプルデータを取った.より詳細にスポーツイベントが参加者のスポーツライフスタイルに与える影響を明らかにするため,イベント後半年など長い間隔後の変化も把握する必要があると考えられる.次は,尺度の選定を再検討することである.本研究では 10%水準で有意な結果が多かった.統計的に説明力が弱いため,より適合なスポーツライフスタイル尺度を再検討する必要がある.それに,対象としたランニングイベントの種類は多かったことである.大規模のフルマラソン大会と少人数の 5KM 未満のファンランがもたらす社会的効果が異なると予想できる.もっと精確的にスポーツイベントが参加者のスポーツライフスタイルに与える影響を把握するため,東京マラソンなど代表的なランニングイベントを選定してから調査を行う必要があると考えた.また,本研究はランニングイベントを対象として調査を行ったが,スポーツ種目によって異なる特性が考えられるため,他のスポーツイベントで調査すると異なる結果がある可能性があると考えられる.今後の課題として,様々な他のスポーツイベントの参加者に対して,より長い期間の追跡アンケート調査やヒアリング調査を実施し,スポーツイベントによるスポーツライフスタイルの影響を把握することでより総括的で,普遍的から詳細な影響を明らかにすることができると考えられる.より明確な影響

を明らかにすることで、今後、スポーツイベントを検討する自治体に対していっそう有用な知見を提供することができ、学術的な知見の構築に貢献できると考える。

参考文献

- Bowles, H. R., Rissel, C., & Bauman, A. (2006). Mass community cycling events: Who participates and is their behaviour influenced by participation?. *International Journal of Behavioral Nutrition and Physical Activity*, 3(1), 39.
- Browne, M. W., & Cudeck, R. (1993). Alternative ways of assessing model fit. *Sage focus editions*, 154, 136-136.
- Chen, F., & Tian, L. (2015). Comparative study on residents' perceptions of follow-up impacts of the 2008 Olympics. *Tourism Management*, 51, 263-281.
- 醍醐笑部, 木村和彦,&作野誠一(2015) バレエ DVD 鑑賞前後における態度・行動意図の変容-大学バレエクラスを対象として. *スポーツ科学研究*, 12, 19-37.
- Derom, I., Van Wynsberghe, R., & Scheerder, J. (2013). Who participates now and in the future? A case study of the Tour of Flanders Cyclo.
- 江頭満正(2016) スポーツツーリストとエクスカーショニストの経済効果比較: 小江戸川越マラソンを事例に. *尚美学園大学総合政策研究紀要*, 27, 89-105.
- Feldman, S.D., Thielbar, G.W. (1975). Life Style: diversity in American Society, Little. Brown & Co., Boston. pp. 1-4.
- Frawley, S., & Cush, A. (2011). Major sport events and participation legacy: The case of the 2003 Rugby World Cup. *Managing leisure*, 16(1), 65-76.

Funk, D. C., Toohey, K., & Bruun, T. (2007). International sport event participation: Prior sport involvement; destination image; and travel motives. *European Sport Management Quarterly*, 7(3), 227-248.

原田宗彦（2002）スポーツイベントの経済学-メガイイベントとホームチームが都市を変える-。平凡社新書。

原田宗彦・菊池秀夫（1990）スポーツ参加者のライフスタイルに関する研究, *体育学研究*, Vol.35, 241-251.

生駒忍（2005）潜在記憶現象としての単純接触効果. *認知心理学研究*, 3(1), 113-131.

井関利明（1979）「ライフスタイルの概念」とその定義. 村田昭治・井関利明・川勝久編著, *ライフスタイル全書*. ダイヤモンド社：東京, pp.-17.

井澤悠樹, 松永敬子, & 中野卓（2012）ライフスタイル・アプローチによるスポーツニーズの発掘に関する研究. *生涯スポーツ学研究*, 8(2), 48-56.

川西正志, 長ヶ原誠, & 北村尚浩(1993) マスターズスイマーのスポーツ的ライフスタイル. *スポーツ社会学研究*, 1, 49-61.

Kim, W., Jun, H. M., Walker, M., & Drane, D. (2015). Evaluating the perceived social impacts of hosting large-scale sport tourism events: Scale development and validation. *Tourism Management*, 48, 21-32.

木田悟（2013）地域社会を生かすースポーツによる社会的効果ー. 木田悟・高橋義雄・藤口光紀（編著）*スポーツで地域を拓く*. 東京大学出版, pp.51-70.

北村尚浩, 川西正志,&池田勝 (1997) スポーツ参加者のスポーツライフスタイルとコミュニティ感情. *体育学研究*, 41(6), 437-448.

北村尚好・川西正志・波多野義郎・柳敏晴・萩裕美子・前田博子・野川春夫 (2000) 生涯スポーツイベント参加者の大会満足度：菜の花マラソン参加者のスポーツライフスタイルによる比較, *鹿屋体育大学学術研究紀要*, Vol.23, 25-31.

北村尚浩 (2014) 鹿児島リレーマラソン参加者の大会満足度. *女性*, 56, 24-2.

小杉佑介 (2017) 定員 1 万人以上のマラソン大会における WEB 上のクチコミ分析.

Lane, A., Murphy, N. M., & Bauman, A. (2008). The impact of participation in the Flora women's mini-marathon on physical activity behaviour in women. *Centre for Health Behaviour Research, Department of Health Sport and Exercise Sciences, Waterford Institute of Technology and Irish Sports Council, Ireland.*

Mahtani, K. R., Protheroe, J., Slight, S. P., Demarzo, M. M. P., Blakeman, T., Barton, C. A., ... & Roberts, N. (2013). Can the London 2012 Olympics 'inspire a generation' to do more physical or sporting activities? An overview of systematic reviews. *BMJ open*, 3(1), e002058.

武藤泰明 (2013) 地域スポーツと地域金融, *金融ジャーナル*, 2013, pp.76-79.

- 二宮浩彰・松永敬子・長積仁（2014）都市型市民マラソンの参加者がもたらす経済波及効果の推計-京都マラソン 2012 ランナー調査に基づいた分析-, *生涯スポーツ学研究*, 10(1/2):31-40.
- 西尾建, 岡本純也, & 石盛真徳(2013) 参加型海外スポーツイベントにおけるアウトバンド・ツーリストの研究-ホノルルマラソン参加者の動機と制約要因について. *スポーツ産業学研究*, 23(1), 1_75-1_88.
- 野川春夫（2010）平成 21 年度日本国内におけるマラソンイベントの活性化に向けた基礎データの収集「全体報告書」. 順天堂大学スポーツ健康科学部スポーツマネジメント学科生涯スポーツ国際比較研究室.
- 大勝志津穂（2014）愛知県における成人女性サッカー選手のスポーツ経験種目に関する研究. *スポーツとジェンダー研究*, 12, 31-46.
- 大勝志津穂(2017) マラソンイベント開催による村の地域活性化に関する研究-うるぎトライアル RUN 参加者の支出による検討. *東邦学誌*, 46(1), 39-48.
- 大西孝之（2013）スポーツ産業の振興による地域活性化：概念の整理と検討. *環境と経営：静岡産業大学論集*, 18(2), 97-109.
- 大窄貴史, 成耆政, 鈴木尚通, 中島弘毅, 葛西和廣, 竹内信江, & 田中正敏. (2012). 地域スポーツイベントにおける経済波及効果及び健康増進に及ぼす影響:「第 2 回塩尻ぶどうの郷ロードレース」の分析を中心に. *松本大学研究紀要*, (10), 13-44.
- 大隅昇(2002)インターネット調査の適用可能性と限界. *行動計量学*, 29(1), 20-44.
- Pappas, N. (2014) Hosting mega events: Londoners' support of the 2012 Olympics. *Hospitality and Tourism Management.*, 21: 10-17

Petrick, J. F., Backman, S. J., Bixler, R., & Norman, W. C. (2001). Analysis of golfer motivations and constraints by experience use history. *Journal of Leisure Research*, 33(1), 56-70.

Ramchandani, G., Davies, L. E., Coleman, R., Shibli, S., & Bingham, J. (2015). Limited or lasting legacy? The effect of non-mega sport event attendance on participation. *European Sport Management Quarterly*, 15(1), 93-110.

Ramchandani, G. M., & Coleman, R. J. (2012). The inspirational effects of three major sport events. *International Journal of Event and Festival Management*, 3(3), 257-271.

RUNET HP, <https://runnet.jp/>(最終閲覧日 11 月 2 日)

笹川スポーツ財団 (2015) ,スポーツライフ・データ, <https://www.ssf.or.jp/report/sldata/tabid/326/Default.aspx>. (最終閲覧日 7 月 10 日)

霜島広樹 (2014) 民間テニスクラブのスクール生に対する競技会参加および競技観戦プログラムが与える影響-クラブマネジメントへの活用可能性の観点から (Doctoral dissertation, 早稲田大学).

スポーツエントリーHP, <https://www.sportsentry.ne.jp/events/calendar/?category=running&onsub=off&order=attention&limit=1&keyword=&y=2017&m=all>. (最終閲覧日 11 月 5 日)

スポーツの実施状況等に関する世論調査 (2017) http://www.mext.go.jp/sports/b_menu/houdou/30/02/1401750.htm (最終閲覧日 10 月 25 日)

Taks, M. (2013) Social sustainability of non-mega sport events in a global world. *European J. for Sport and Society*, 10: 121-141

Taks, M., Green, B. C., Misener, L., & Chalip, L. (2014). Evaluating sport development outcomes: The case of a medium sized international sport event. *European Sport Management Quarterly*, 14(3), 213-237.

辻和真, 二宮浩彰, 庄子博人, 備前嘉文, ツジカズマ, ニノミヤヒロアキ, & ビゼンヨシフミ (2016) 居住地からみた都市型市民マラソン参加者の消費行動: 奈良マラソン 2014 の参加に伴う消費支出額の分析. *同志社スポーツ健康科学*, (8), 23-31.

邑木隆二. (2011). 総合型地域スポーツクラブによる地域活性化及び今後のクラブ展望: 入間市市民意識調査結果及び活動現状からの考察. *駿河台大学論叢*, (43), 163-176.

Weed, M., Coren, E., Flore, J., Mansfield, L., Wellard, I., Chatziefstathiou, D., & Dowse, S. (2009). A systematic review of the evidence base for developing a physical activity and health legacy from the London 2012 Olympic and Paralympic Games. London: Department of Health.

横田匡俊 (2002) 運動部活動の継続及び中途退部にみる参加動機とバーンアウトスケールの変動. *体育学研究*, 47(5), 427-437.

周強, & 菊池秀夫 (2009) 知覚されたサービス品質が利用満足と行動意図に及ぼす影響: 中国のフィットネスクラブにおける実証研究. *スポーツ産業学研究*, 19(1), 25-39.

巻末資料

調査①のアンケート

選択肢記号の説明

- ☐ 複数選択（チェックボックス）
- ☐ 単一選択（ラジオボタン）
- ☐ 単一選択（プルダウン）

SQ1

あなたは2週間以内に下記のランニングイベントに参加する予定がありますか。

そのジャンルとして当てはまるものをお選びください。

※選択肢9-13のランニングイベントは距離を問いません。

また、親子ペアで走る、山中を走る等、
競技マラソンとは違った趣旨の軽いランニングイベントも全て対象とします。

☐ 1. ウルト라마ラソン（42.195kmより長い）

☐ 2. フルマラソン

☐ 3. 30Km

☐ 4. ハーフマラソン・20Km

☐ 5. 15Km

☐ 6. 10Km

☐ 7. 5Km

- ☐ 8. 5Km 未 満
-
- ☐ 9. 親 子 マラソン(ファミリーラン)
-
- ☐ 10. 駅 伝・リレーマラソン
-
- ☐ 11. トリムマラソン
-
- ☐ 12. トレイルラン・山 岳 レース・クロスカントリー
-
- ☐ 13. 記 録 会、トラック
-
- ☐ 14. 上 記 のランニングイベントには参加の予定はない
-

Q1

今回参加を予定しているランニングイベントを除いて、過去にランニングイベントに参加した経験がありますか。

※ランニングイベントは距離を問いません。

また、親子ペアで走る、山中を走る等、
競技マラソンとは違った趣旨の軽いランニングイベントも全て対象とします。

-
- ☐ 1. ない
-
- ☐ 2. ある これまで【N】回※10回以上ある方は10回と教えてください。
-

Q2

現在の運動・スポーツの実施頻度について当てはまるものをお選びください。

(通勤や通学などの生活運動を除き、散歩などの軽い運動を含めて意図的に1日30分以上の運動時間を対象とします)。

- ☐ 1. 全くしない
- ☐ 2. 年に1～3日以下
- ☐ 3. 3ヶ月に1～2日
- ☐ 4. 月に1～3日
- ☐ 5. 週に1～2日
- ☐ 6. 週に3～4日
- ☐ 7. 週に5日以上

Q3

今回のランニングイベントへの参加動機についてお答えください。

以下の項目にそれぞれ当てはまるものをお選びください。

※2週間以内に複数のイベントに参加される方は

直近で参加するランニングイベントについての参加動機をお答えください。

項目リス

ト

Q3S1

1. 走ることに興味があるから

Q3S2

2. 走ることが好きだから

Q3S3	3. ランニングへの関心が高いから
Q3S4	4. 走ることは重要だと思うから
Q3S5	5. 新しい人と出会いたいから
Q3S6	6. 他の参加者と喜びを分かち合いたいから
Q3S7	7. 日常生活から離れたいから
Q3S8	8. ランニングで興奮を味わいたいから
Q3S9	9. ランニングで新たな自分を発見したいから
Q3S10	10. ランニングで達成感を味わいたいから
Q3S11	11. 生活に変化を与えたいから
Q3S12	12. 走っていることによって満足感を得たいから
Q3S13	13. ランニング大会へ参加することは重要だと思うから
Q3S14	14. ランニング大会は他のレジャーより価値があるから

選択肢リスト

- ☐ 1. 全く当てはまらない
- ☐ 2. あまり当てはまらない
- ☐ 3. どちらともいえない
- ☐ 4. やや当てはまる
- ☐ 5. 非常に当てはまる

Q4

現在スポーツに関連するあなたの行動について当てはまるものをお選びください。

項目リス

ト

Q4S1	1. スポーツ用品をよく買う（ご自身用）
Q4S2	2. 地域で行われるスポーツ行事には積極的に参加する
Q4S3	3. スポーツに関するニュースは毎日チェックする
Q4S4	4. よくスポーツ観戦をしに現場へ行く
Q4S5	5. スポーツ活動に関して友人によく話す
Q4S6	6. 地域のスポーツクラブで積極的に活動している
Q4S7	7. 他人より自主的にスポーツに取り組んでいる
Q4S8	8. よくテレビやネットでスポーツ観戦をする

選択肢リスト

- ☐ 1. 全く当てはまらない
- ☐ 2. あまり当てはまらない
- ☐ 3. どちらともいえない
- ☐ 4. やや当てはまる
- ☐ 5. 非常に当てはまる

Q5

現在スポーツに関連するあなたの関心、態度や意見について当てはまるものをお選びください。

項目リス

ト

Q5S1	1. スポーツをすることが生きがいである
Q5S2	2. スポーツで人と競うことが好きだ
Q5S3	3. スポーツは健康維持に欠かせない
Q5S4	4. スポーツ用品に興味がある
Q5S5	5. 勝敗にこだわらず楽しくスポーツを行っている
Q5S6	6. スポーツは勝つことに意義があると思う
Q5S7	7. スポーツの効果をあげるために食事や睡眠に気をつけている
Q5S8	8. スポーツは人間形成に役立つ
Q5S9	9. スポーツで健康な身体を維持できる
Q5S10	10. 地域のスポーツ活動の手伝いをすることが好きだ
Q5S11	11. スポーツをする姿は美しい

選択肢リスト

- ☐ 1. 全く当てはまらない
- ☐ 2. あまり当てはまらない
- ☐ 3. どちらともいえない
- ☐ 4. やや当てはまる
- ☐ 5. 非常に当てはまる

調査②のアンケート

選択肢記号の説明

- ☐ 複数選択（チェックボックス）
- ☐ 単一選択（ラジオボタン）
- ☐ 単一選択（プルダウン）

Q1

あなたが11月3日（土）～11月18日（日）の期間内に参加した

ランニングイベントのジャンルとして当てはまるものをお選びください。

※選択肢9～13のランニングイベントは距離を問いません。また、親子ペアで走る、

山中を走る等、競技マラソンとは違った趣旨の軽いランニングイベントも全て対象とします。

※複数参加された方は、最も距離の長いランニングイベントをお選びください。

-
- ☐ 1. ウルト라마ラソン（42.195Km より長い）
 - ☐ 2. フルマラソン
 - ☐ 3. 30Km
-

☐ 4. ハーフマラソン・20Km

☐ 5. 15Km

☐ 6. 10Km

☐ 7. 5Km

☐ 8. 5Km 未 満

☐ 9. 親 子 マラソン(ファミリーラン)

10
☐ 駅 伝 ・リレーマラソン
.

11
☐ トリムマラソン
.

12
☐ トレイルラン
.

13
☐ 山 岳 レース
.

14
☐ クロスカントリー
.

15
☐ 記 録 会 、トラック
.

16
☐ この期 間 内 に上 記 のランニングイベントに参加しなかった
.

Q2

あなたが今回参加されたランニングイベントが開催された日付をお答えください。

※複数参加された方は、最も距離の長いランニングイベントについてお答えください。以降の設問も同様です。

1. Q2S1【N】日

Q3

あなたが今回参加されたランニングイベントの開催場所として当てはまるものをお選びください。

-
- ☐ 1. お住まいの都道府県内
-
- ☐ 2. お住まいの都道府県外
-

Q4

あなたが今回参加したランニングイベントに対する満足度を教えてください。

-
- ☐ 1. 非常に不満
-
- ☐ 2. やや不満
-
- ☐ 3. どちらともいえない(普通)
-
- ☐ 4. やや満足
-

- ☐ 5. 非常に満足
-

Q5

あなたが今回のランニングイベントに参加するために、
交通費、宿泊費、飲食費、おみやげ代、事前準備費などに使った支出の合計はいくらですか。

-
- ☐ 1. 0 円
-
- ☐ 2. 1 円～1 万円未満
-
- ☐ 3. 1 万円～2 万円未満
-
- ☐ 4. 2 万円～3 万円未満
-
- ☐ 5. 3 万円～4 万円未満
-
- ☐ 6. 4 万円～5 万円未満
-
- ☐ 7. 5 万円～6 万円未満
-
- ☐ 8. 6 万円～7 万円未満
-
- ☐ 9. 7 万円～8 万円未満
-
- 10
☐ 8 万円～9 万円未満
.
-
- 11
☐ 9 万円～10 万円未満
.
-
- 12
☐ 10 万円以上
.
-

Q6

今回のランニングイベントに参加するために、宿泊の有無について教えてください。

-
- ☐ 1. なし
-
- ☐ 2. あり【N】泊
-

Q7

11月3日（土）から12月7日（金）までの期間に、あなたが今回参加された

ランニングイベント以外に参加したスポーツイベントがありますか。

※スポーツイベントとは、ランニングに関わらず、スポーツ全般のイベントを対象とします。

-
- ☐ 1. ない
-
- ☐ 2. ある
-

Q8

現在の運動・スポーツの実施頻度について当てはまるものをお選びください。

(通勤や通学などの生活運動を除き、散歩などの軽い運動を含めて意図的に1日30分以上の運動時間を対象とします)。

- | | |
|--------------------------|----------|
| ☐ 1. | 全くしない |
| ☐ 2. | 年に1～3日以下 |
| ☐ 3. | 3ヶ月に1～2日 |
| ☐ 4. | 月に1～3日 |
| ☐ 5. | 週に1～2日 |
| ☐ 6. | 週に3～4日 |
| ☐ 7. | 週に5日以上 |

Q9

現在スポーツに関連するあなたの行動について当てはまるものをお選びください。

項目リス

ト

Q9S1

1. スポーツ用品をよく買う(ご自身用)

Q9S2

2. 地域で行われるスポーツ行事には積極的に参加する

Q9S3

3. スポーツに関するニュースは毎日チェックする

Q9S4

4. よくスポーツ観戦をしに現場へ行く

Q9S5

5. スポーツ活動に関して友人によく話す

Q9S6

6. 地域のスポーツクラブで積極的に活動している

Q9S7

7. 他人より自主的にスポーツに取り組んでいる

Q9S8

8. よくテレビやネットでスポーツ観戦をする

選択肢リスト

☐ 1. 全く当てはまらない

☐ 2. あまり当てはまらない

☐ 3. どちらともいえない

☐ 4. やや当てはまる

☐ 5. 非常に当てはまる

Q10

現在スポーツに関連するあなたの関心、態度や意見について当てはまるものをお選びください。

項目リス

ト

Q10S1

1. スポーツをすることが生きがいである

Q10S2

2. スポーツで人と競うことが好きだ

Q10S3

3. スポーツは健康維持に欠かせない

Q10S4

4. スポーツ用品に興味がある

Q10S5

5. 勝敗にこだわらず楽しくスポーツを行っている

Q10S6

6. スポーツは勝つことに意義があると思う

Q10S7

7. スポーツの効果あげるために食事や睡眠に気をつけている

Q10S8	8. スポーツは人間形成に役立つ
Q10S9	9. スポーツで健康な身体を維持できる
Q10S10	10 地域のスポーツ活動の手伝いをすることが好きだ
Q10S11	11 スポーツをする姿は美しい

選択肢リスト

- ☐ 1. 全く当てはまらない
- ☐ 2. あまり当てはまらない
- ☐ 3. どちらともいえない
- ☐ 4. やや当てはまる
- ☐ 5. 非常に当てはまる

謝 辞

本研究を進めるにあたり,木村和彦教授から多くのご支援およびご指導を賜りまして,誠に感謝しております.さらに本研究を実施するに当たり,日頃から多くの知識や助言を与えて頂いた作野誠一先生,原田宗彦先生,霜島広樹先生,醍醐笑部先生には深く感謝しております.また,調査実施に当たりご協力を頂いたマクロミルの白石様,八角様,日下様にも深く感謝しております.最後に,日頃から多くの学びを与えて頂いた木村研,作野研,原田研究の先輩,同期,その他関係各位の皆様に深く感謝の念を申し上げ謝辞にかえさせていただきます.